

# 杉ノ木遺跡

—蒲生郡蒲生町大塚所在—

1989

滋賀県教育委員会  
財団 滋賀県文化財保護協会

# 杉ノ木遺跡

—蒲生郡蒲生町大塚所在—

1989

滋賀県教育委員会  
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、個性豊かな文化環境づくりに取り組んでいます。特に文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営は場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただきました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

滋賀県教育委員会

教育長 西 地 季 節

## 例　　言

1. 本書は昭和63年度県営は場整備事業に伴う蒲生郡蒲生町杉ノ木遺跡の発掘調査報告書であり、昭和63年度に発掘調査し、平成元年度に整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財團法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、蒲生町教育委員会および地元の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

平成元年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 伊香 照男

〃 課長補佐 小川 啓雄

埋蔵文化財係長 近藤 濩

〃 主任技師 田路 正幸

管理係主任主事 山出 隆

財團法人滋賀県文化財保護協会

理事長 古崎 貞一

事務局長 中島 良一

専門員兼企画調査課長 林 博通

調査第一係長 大橋 信弥

調査普及課技師 奈良 俊哉

総務課長 山下 弘

昭和63年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 挿出亀与嗣

〃 課長補佐 小川 啓雄

埋蔵文化財係長 林 博通

〃 主任技師 木戸 雅寿

管理係主任主事 山出 隆

財團法人滋賀県文化財保護協会

理事長 吉崎 貞一

事務局長 中島 良一

企画調査課長 近藤 濩

調査第一係長 大橋 信弥

〃 技師 奈良 俊哉

総務課長 山下 弘

6. 本書は、奈良が執筆・編集を行なった。

7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例 言

第1章 はじめに ..... 1

第2章 調査の経過 ..... 1

第3章 調査の結果 ..... 4

1. (第1トレンチ) ..... 4
2. (第2トレンチ) ..... 4
3. (第3トレンチ) ..... 4
4. (第4トレンチ) ..... 6
5. (第5トレンチ) ..... 6
6. (第6トレンチ) ..... 8
7. (第7トレンチ) ..... 9
8. (第8トレンチ) ..... 12
9. 第7・第8トレンチの出土遺物 ..... 15

第4章 まとめ ..... 16

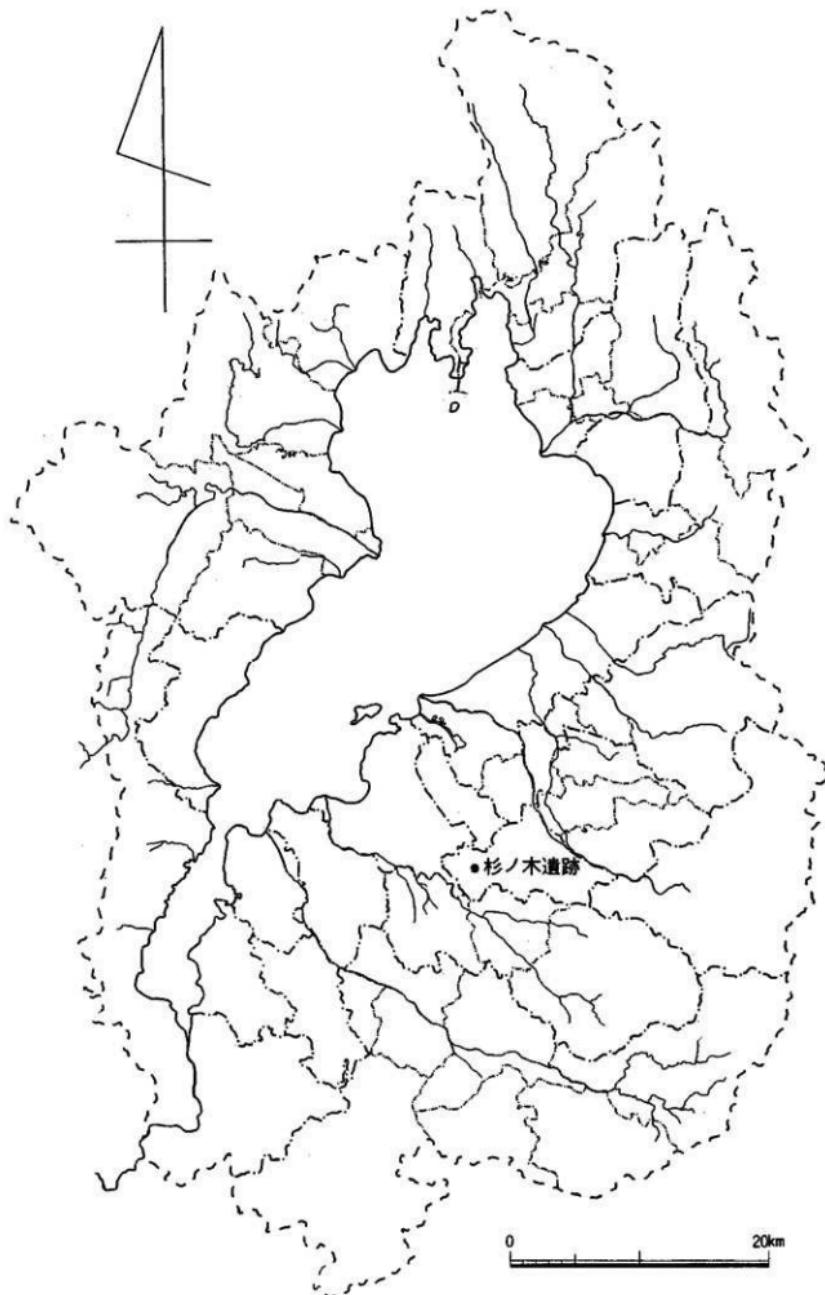
## 図版目次

- 図版一 杉ノ木遺跡 上 発掘調査前風景  
下 発掘調査前風景
- 図版二 同上 上 第1トレンチ全景(東より)  
下 第1トレンチ作業風景
- 図版三 同上 上 第2トレンチ作業風景  
下 第2トレンチ遺構検出状況
- 図版四 同上 上 第3トレンチ全景(西より)  
下 第3トレンチ遺構検出状況
- 図版五 同上 上 第3トレンチ遺構検出状況  
下 第3トレンチ全景(東より)
- 図版六 同上 上 第3トレンチ遺構検出状況  
下 溝検出状況(東より)
- 図版七 同上 上 第4トレンチ全景(西より)  
下 第4トレンチ遺構検出状況
- 図版八 同上 上 第4トレンチ遺構検出状況  
下 第4トレンチ遺構検出状況
- 図版九 同上 上 第5トレンチ全景(東より)  
下 第6トレンチ掘削風景
- 図版十 同上 上 第7トレンチ発掘調査前風景  
下 第8トレンチ発掘調査前風景
- 図版十一同上 上 第7トレンチ上層部遺構検出作業風景  
下 第7トレンチ上層部遺構検出作業風景
- 図版十二同上 上 第7トレンチ土壤検出作業風景  
下 第7トレンチ土壤検出作業風景
- 図版十三同上 上 第7トレンチ遺物出土状況  
下 第7トレンチ遺物出土状況
- 図版十四同上 上 第7トレンチ堅穴式住居  
下 第7トレンチ須恵器出土状況
- 図版十五同上 上 第7トレンチ溝検出状況  
下 第7トレンチ下層遺構全景
- 図版十六同上 上 第8トレンチ遺構検出作業風景  
下 第8トレンチ遺構掘削風景
- 図版十七同上 上 第8トレンチ東側作業風景

	下 第8トレンチ東側遺構掘削風景
図版十八同上	上 第8トレンチ中央部作業風景
	下 第8トレンチ中央部遺構掘削風景
図版十九同上	上 第8トレンチ南側作業風景
	下 第8トレンチ南側遺構掘削風景
図版二十同上	上 第8トレンチ全景
	下 第8トレンチ全景
図版二十一同上	遺物実測図(1)
図版二十二同上	遺物実測図(2)
図版二十三同上	遺物実測図(3)
図版二十四同上	遺物実測図(3)
図版二十五同上	遺物実測図(4)

## 挿 図 目 次

1. 周辺遺跡分布図	2
2. トレンチ配置図	3
3. 第1、2トレンチ平面図および断面図	5
4. 第3、4トレンチ平面図および断面図	7
5. 第5、6トレンチ平面図および断面図	8
6. 第7トレンチ上層遺構	10
7. 第7トレンチ下層遺構	11
8. 第8トレンチ遺構平面図	13



## 第1章 はじめに

本報告は、昭和63年度に行われた県営は場整備事業（蒲生南部地区大塚第4工区）に伴う杉ノ木遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果報告である。

当該地は、蒲生郡蒲生町大塚の地先にあり、現在の大塚の集落の西側で、東側には川井の集落があり、この二つの集落に挟まれたところに位置している。西側の大塚の集落は、調査地点の水田よりかなり高くなっている。大塚城跡があるところとされている。また、調査地の北側には、平塚遺跡や、市子遺跡などの遺跡があり、これまでの調査によれば弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代後期の集落、平安時代末期の掘立柱建物群などの遺構が検出されている。また、杉ノ木遺跡の北西部には、昭和61年度に調査が行われた室出遺跡がある。ここでは古墳時代から鎌倉時代までの遺構が検出されており、注目されるのは5世紀後半から6世紀後半までの時期と考えられる馬鐵が出土していることである。さらに溝からは、古墳時代中期の手づくね土器が多量に遺棄された状態で出土しており、古墳時代の、それも内陸部の集落の祭祀を考えるうえでたいへん重要な発見であったといえるだろう。また、この地は蒲生郡条理とよばれる条理地割が残っている所でもあり、弥生時代以降の遺跡の分布を見ると、たいへん集中していることがわかる。方形周溝墓群や馬鐵の出土、祭祀関係の遺物などから、杉ノ木遺跡をとりまく周辺は、何世代にもわたって集落を築きあげていたことが理解できよう。

このように、ここに遺跡が集中して存在する理由は、一つには立地的な条件があげられる。杉ノ木遺跡を中心とした土地は、1級河川である日野川と佐久良川が合流した地点の三角洲上に立地している。また、この両河川より派生する中小河川が、この地一帯を無数に流れしており、土壤的には、比較的よく肥えた土地であるといえる。また中小河川が多いということは、水田経営をするうえで、水利条件が良いということでもある。さらに、付近一帯は、丘陵地帯であり、この丘陵おも生活条件のなかにいれることができれば、生活状態も良いものになるであろう。そのことを考えにいれるならば、日野町から蒲生町にかけて、たくさんの窯跡があることはうなずける理由の一つになるであろう。

ここで、杉ノ木遺跡の地形を補足として説明しておこう。杉ノ木遺跡の西側を古川(ふるこう)とよばれる中河川が流れている。この古川は、杉ノ木遺跡にかなりの影響を与えていたらしく、上層部は、この川の影響でかなり流されている部分がある。しかし、この川によってこの付近の集落の境界線がひけるのではないかと現状の地形からも考えられる。古川は、ここだけではなく北にある堂田遺跡や市子遺跡にも影響を与えており、こうした河川をもっと丁寧に観察していくばさらにこの付近の歴史が鮮明になるであろう。

## 第2章 調査の経過

今回の調査は、当該地が昭和63年度には場整備工事の対象地になり、これを受けて滋賀県教育

委員会が調査主体となり、滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。対象となった地区は、蒲生郡蒲生町大塚地先の蒲生南部地区大塚第4工区で、第1-20号小排水路をまず最初に調査した。ここでは、設定したトレンチの立地条件によって第1から第6トレンチまでにわけて調査を行った。

次に第1-21号小排水路の北側の、計画番号16と17の田面にかかるように位置する休耕田の調査を行った。このトレンチを第7トレンチとした。

次に計画番号9番の田面を調査する予定であったが、西側にある計画番号21番の田面の一部も工事計画高で見ると、遺構面に影響を与えることがわかったため、この部分についてもあわせて調査を行うこととした。

発掘調査は、まずバックホーによって表土を除去し、遺構面まで検出したのち、人力によって遺構面を精査して遺構を検出した。このあとに遺構をスコップや手スコを使用して掘削を行った。

トレンチの実測は、第1から第7トレンチまでは、20分の1、平板測量によっておこなったが、第8トレンチについては、空中測量によって行った。

現地調査は、昭和63年7月1日より行い、同年10月31日まで行った。調査面積は、3557m<sup>2</sup>であった。

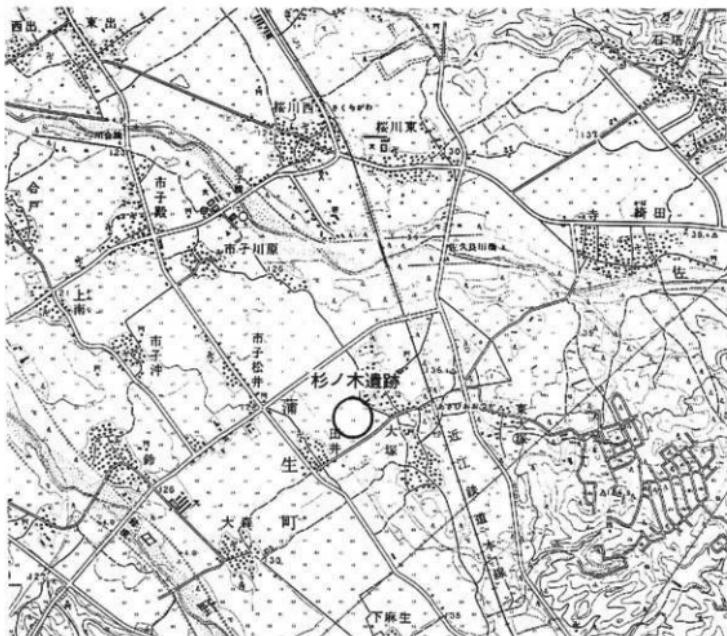


図1 周辺遺跡分布図

図2 トレンチ配置図



### 第3章 調査の結果

今回の調査では便宜上、調査区を立地条件等によって8カ所のトレンチに分けて調査を行った。最初に各トレンチで検出した遺構の概要を述べ、遺物についてはあとでまとめて述べることにする。

#### (第1トレンチ)

第1トレンチは、古川の東側にあたり、工事計画では、第1-20号小排水路の部分である。トレンチの幅は約2.2mで、古川に沿うように弧を描いている。このため、トレンチの横断図は、2つに分けた。

このトレンチからは、柱穴や溝などが検出されているが、遺物は出土しなかった。

検出された遺構には、特にまとまった物ではなく、柱穴にしてもどのような方向に広がりをもつものかは、判明しなかった。

なお、第1トレンチの基本層位は、第1層で厚さ約20cm程の古川の改修工事による搅乱層が、全面にある。第2層から第5層までは砂質泥土が混じる層で、旧古川の氾濫によるものであると考えられている。

遺構を検出した第6層は淡灰青色粘土で、面的にはかなりしっかりとした面である。

遺構は、この面に暗茶灰色の粘土で区別されて検出される。

#### (第2トレンチ)

第2トレンチは東西方向に延びるトレンチである。幅は約2.2mで、長さは約68mである。

第2トレンチの基本層位も第1トレンチと同様で、上層部では、かなりの搅乱をうけている。また、古川より離れていくにもかかわらず、上層部から遺構面までの層には多量の砂質泥土が混じっており古川の氾濫の広さが伺われる。

遺構面は第1トレンチと同じ淡青灰色粘土であり、遺構も同じ暗茶灰色の粘土で区別できる。検出した遺構は、南北方向に流れる溝を4条、柱穴、土壤、などである。南北方向に流れる溝は西側より、幅約3m、4.3m、1.5m、2.6mであった。この中でSD-2とした溝は最深部で84cmもあり、他の溝と比べると性格の違う溝であると考えられる。柱穴は、どれも並ぶものなく、また土壤も遺物がなく、性格は判明しなかった。しかし、柱穴を一つ一つ観察すると、掘り方や柱当たりなどが良く見え、SD-1の西側にある柱穴は、柱穴はないものの、掘立柱建物の一部であることが推測される。

なお、第2トレンチからは、遺物はまったく出土せず詳細な時期については不明である。

#### (第3トレンチ)

第3トレンチは、東西方向に延びるトレンチである。幅は約2.2mで、長さ約55mである。

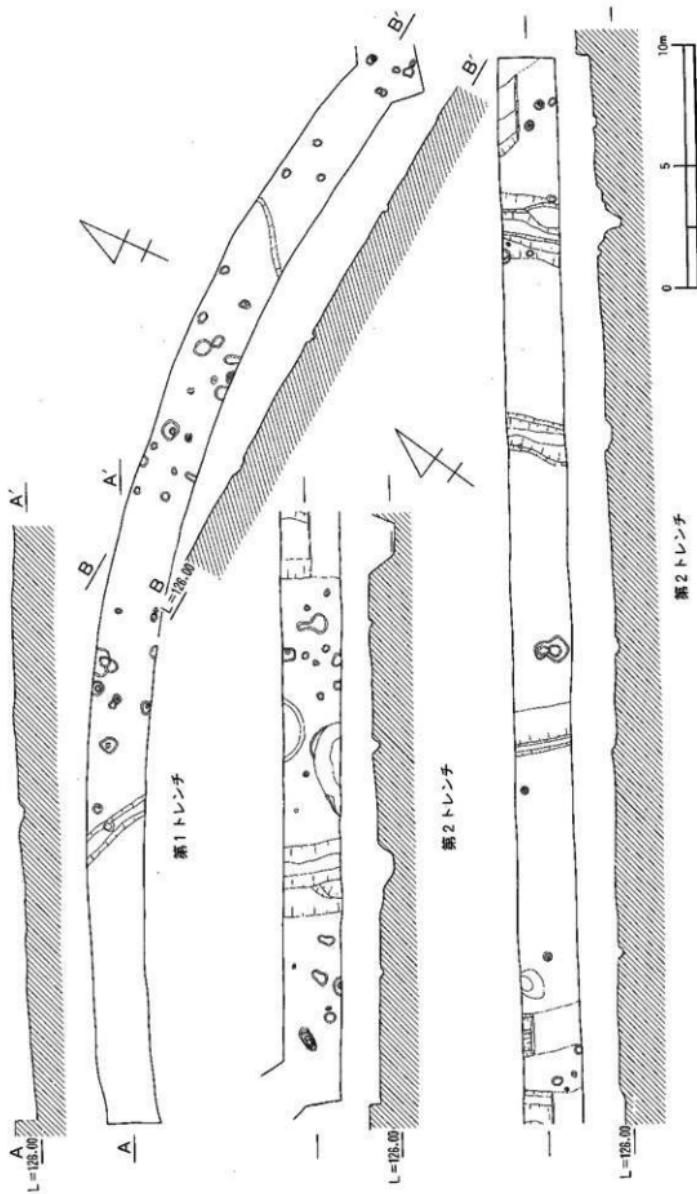


図3 第1・2トレンチ平面図及び断面図

第3トレンチの基本層位は、やはり上層部が搅乱を受けているものの、この層を除去すれば、畠田面の耕作土および床土と考えられる粘土層がある。さらに、この粘土層の下には、砂混じりの粘土層があり、これも古川の氾濫と関係がある層なのかもしれないと考えている。

第3トレンチの遺構としては、南北方向に流れる溝1条、東西方向に流れる溝2条、その他に、多数の柱穴などが検出されている。特に、SD-1とした溝からは、建築部材の一部であると考えられる板材が出土している。この板材は、トレンチの幅より長く、部分的に、たぬき掘りをして、抜いて見たが、特に加工痕跡のある様なものではなかった。

また、多數検出された柱穴は、どれも並ぶものはなかった。また、遺物も板材の他はなにも出土せず、時期のわかるものはなかった。

しかし、柱穴の切りあい関係から、何時期かにわたって、この面で生活していたことはたしかであろう。

#### (第4トレンチ)

第4トレンチは、東西方向に延びるトレンチである。幅は約2.2m、長さは約71mである。

このトレンチは、蒲生町教育委員会が行っている、国営かんがい排水事業に伴う発掘調査地のすぐ西側にある。

第4トレンチの基本層位は、これまでみられたような搅乱がなくなり、現在の田面を除去すると、砂と粘土の混じった層が、3層程みられた後に、遺構面が検出される。遺構面は、これまでと同じ、淡青灰色の粘土である。

第4トレンチの遺構は、複雑な切りあいをみせる柱穴と、井戸などである。

柱穴は、ここでもならぶものもなく、また、遺物も検出されていないので、時期については、まったく不明である。しかし、第3トレンチと同じように、複雑に切りあっていることから、数時期にわたって生活していたことが確認される。

また、井戸は、これらの遺構よりも1層上の層から検出されており、時期も新しくなると考えられるが、井戸の掘り方と南側の外堀しかトレンチ内にかからず、その大半はトレンチ外で、全容を知りうることはできなかった。

#### (第5トレンチ)

第5トレンチは、東西方向に、延びるトレンチである。幅2.2m、長さは2.2mである。

第5トレンチの基本層位は、第4トレンチとかわらず、耕作土および床土を除去すると砂混じりの粘土層があり、この下に遺構面が検出される。しかし、遺構面の上質は砂質土であり、第1から第4トレンチまでの、遺構面の高さより低くなっている。また、遺構面を検出した時点で、かなりの出水があり、第5トレンチより東側では、湿地帯であったことがわかる。

遺構としては、南北方向に流れる溝を2条検出したことにどまった。また、トレンチの中央より東側では、遺構面が徐々に下がっており、沼沢地の様相を呈している。

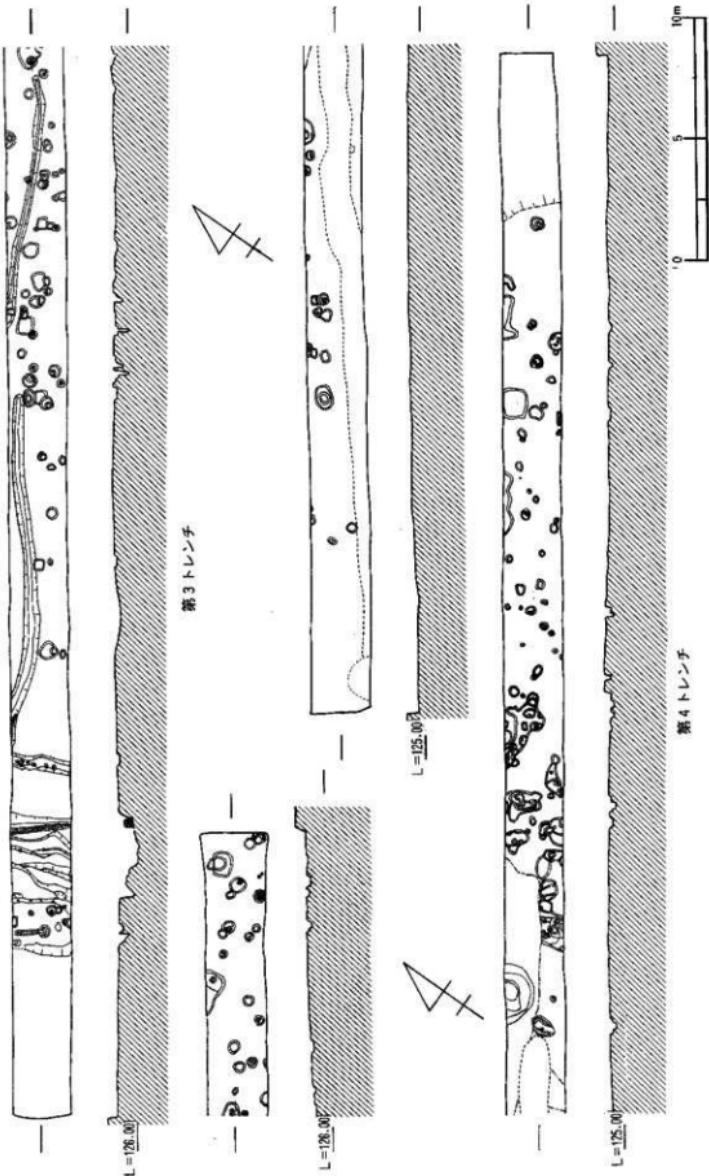


図 4 第3・4 レンチ平面図及び断面図

### (第6トレンチ)

第6トレンチは、南北方向に延びるトレンチである。幅は、1.8m、長さは12mである。

第6トレンチの基本層位は、上層部より、砂混じりの粘土が検出され、また、掘削時より、かなりの出水があって第5トレンチ同様に、沼沢地の様相を呈している。

造構としては、溝を1条検出したが、これははっきりとしたものではなかった。いずれにしても、第5トレンチより東側では、沼沢地であった可能性が強いと考えられる。

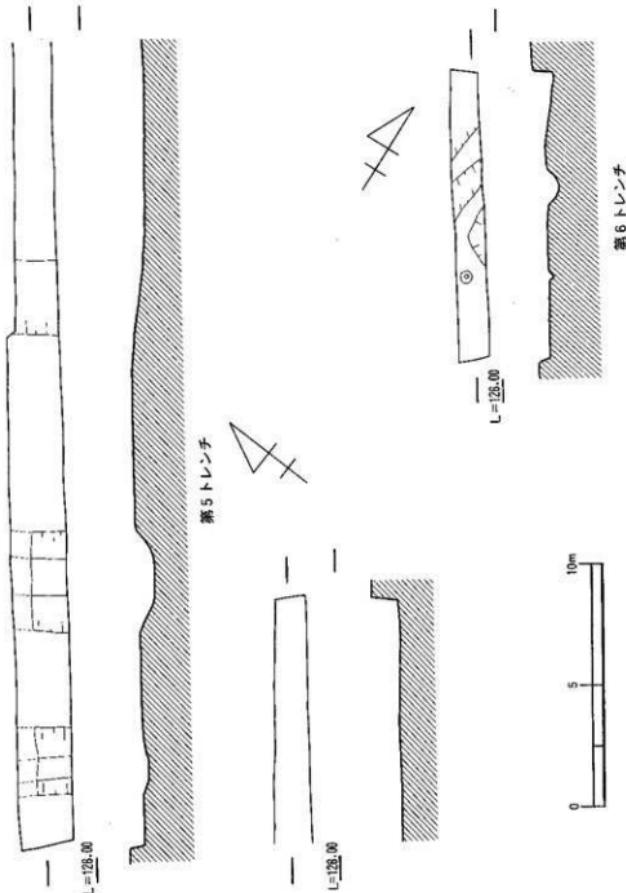


図5 第5・6トレンチ平面図及び断面図

### (第7トレンチ)

第7トレンチは、大塚の集落と古川に挟まれた地点にあり、休耕地となっていたところである。周囲の田面と比較すると、約10cm程高くなっている。また、トレンチの南側は、前年度に、瀬生町教育委員会によって発掘調査が行われており、この時の調査では、古墳時代の木製の斧が出土している。

第7トレンチは、東西方向に設定したトレンチであるが、これまでのトレンチとは違い、台形状を呈し、面的にトレンチを設定した。面積は約800m<sup>2</sup>である。

第7トレンチの基本層位は、まず、現在の耕作土および床土があり、これを除去すると砂混じりの粘土層が検出される。この層は、3層あり、これらを除去すると遺構面に達する。砂混じりの粘土層は、第1から第6トレンチまで、同じように検出されており、第7トレンチでも古川の影響による堆積かと考えられる。また、これらの層には、まったく遺物が含まれてはいなかった。

遺構面は黄褐色粘土層で、かなりしっかりとした面である。トレンチの西側と南側で下層を確かめるために、約50cm程掘削してみたが、黄灰色の砂質層が広がっているだけで、この層からも遺物は検出されなかった。なお、遺構は茶褐色土で区別される。

遺構は、トレンチの東から西に向かって流れるL字形の溝が2条、また、東西方向に流れる溝が数条検出されている。さらに、南北方向に流れる溝も、1条だけではあるが、検出された。

トレンチを縦断するように流れるL字形の溝、SD-1は、途中で深さに多少の変化はあるものの、つながっているものである。その横を並行して流れる溝は、幾つかの切りあいをもちながら、流れているものである。この切りあいを見てみると、まず、SD-10があり、これをSD-3が切っている。そして、SD-12が、SD-3を切っている。SD-12は、SD-6 SD-13、SD-14などの東西方向に流れる溝と方向的にも同じ向きであり、また、出土した須恵器小破片から、奈良時代ごろの遺構であると考えられる。一方、SD-3は、SD-5に至り、消滅してしまう。SD-5も、SD-7のところで、消滅してしまう。この二つの溝からも、須恵器の小破片が出土しており、6世紀から7世紀にかけてのものではないかと考えている。SD-1からは、土器などの遺物は出土していないが、SD-3は、SD-7などから考えて、ほぼ同時期のものと考えて良いであろう。トレンチの西側より検出された東西方向の小溝群は、遺物が、まったく入っておらず詳細な時期についてはわからないが、SD-12と同じ頃のものとしてもよいのではないだろうか。

SD-1を掘削しているときに、古墳時代前半の土器と遺構が、溝内より検出された。このことより、この面より下層に、遺構面があるのではないかと考えられたため遺構が検出されなかかった中央部をさらに掘削したところ、約10cm程下のところより土壤、溝が検出された。また、トレンチの西側で竪穴式住居の最下部が検出された。

### SD-2

SD-2は、トレンチの中央部を、南北方向に流れる溝である。幅は、溝の肩部で1.4mで、

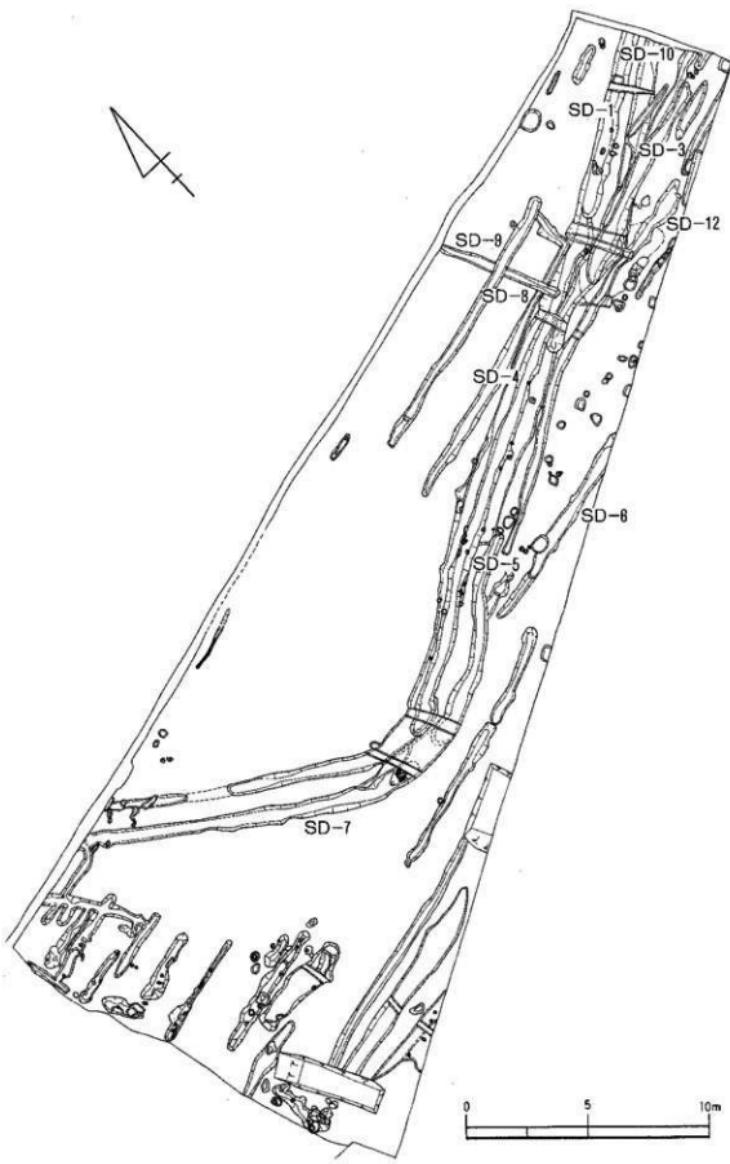


図 6 第 7 トレンチ上層造構

深さは、最深部で約60cmである。この溝は、断面観察によれば、ほぼ一層で埋まっているが、上層部のみに須恵器が出上している。この須恵器は時期幅があり、古墳時代後半から奈良時代にかけてのものである。しかし、SD-1、SD-5などの時期を考えれば古い方に入れてよいのかもしれない。

### SK-1

SK-1は、不定形の土壌で長さ7m、幅4.5mで、最深部は80cmほどである。この土壌は深さが3段になっており、土壌全体から土器が出上している。当初、いくつかの土壌が重なりあっているものかと考えられたが、完全に掘削した後に断面観察を行った結果、一つの土壌であり、さらに、包含されていた土器は、一括りの高い遺物群であることがわかった。堆積層は、土よりも土器のほうが、多いくらいで、細かく分けることができないが、一度に投棄したような状況で、また、たいへん硬い層であった。

### SD-10

SD-10は、SK-1によって、切られており、また土器もまったく出土していない。しかし、SK-1は、古墳時代前半であることはまちがいないので、この時期よりも下があると考えている。また、断面観察によれば、この溝も、あまり分層することができず、短期間のうちに埋まったものと考えられている。

### (第8トレンチ)

第8トレンチは、今回設定したトレンチの中で一番南側にあたり、大塚の集落の内どなりで、県道の北側にあたる。このトレンチの東隣するところで、浦生町教育委員会が、発掘を行っており、この時は、古墳時代から中世までの遺物を含む河川跡が検出されている。また、トレンチの、西隣するところでは、同教育委員会によって発掘調査が行われており、おなじく、古墳時代から中世までの遺構が検出されている。

このように、第8トレンチは、これまでの調査区の、空白部分を埋めるような形で設定されたトレンチである。トレンチの面積は2254m<sup>2</sup>である。

第8トレンチは、現在の耕作土および床土を掘削した時点で、遺構面に達したため、深さは約30cm程しか掘削していない。

### 遺構

検出した遺構は、中世の堀とり溝群、南北方向に流れる溝、土壌などである。この中で、南北方向に流れる溝は、東側で調査が行われたときの残りの部分にあたり、上面で須恵器が検出されている。この溝については、工事計画の高さの関係により掘削はしなかった。

中世の堀とり溝群としたものは、東西、南北の方向に流れるもので、整然と検出された。溝の幅は約50cmから60cm位のものであるが、深さは30cmほどである。

溝の単位をみてみると、南側の一群と北側の一群にわけられると考えられる。このわけかたは、東西方向に流れる溝からわりだしたもので、溝の中心間の距離は約2.5mで、どちらの群の溝も

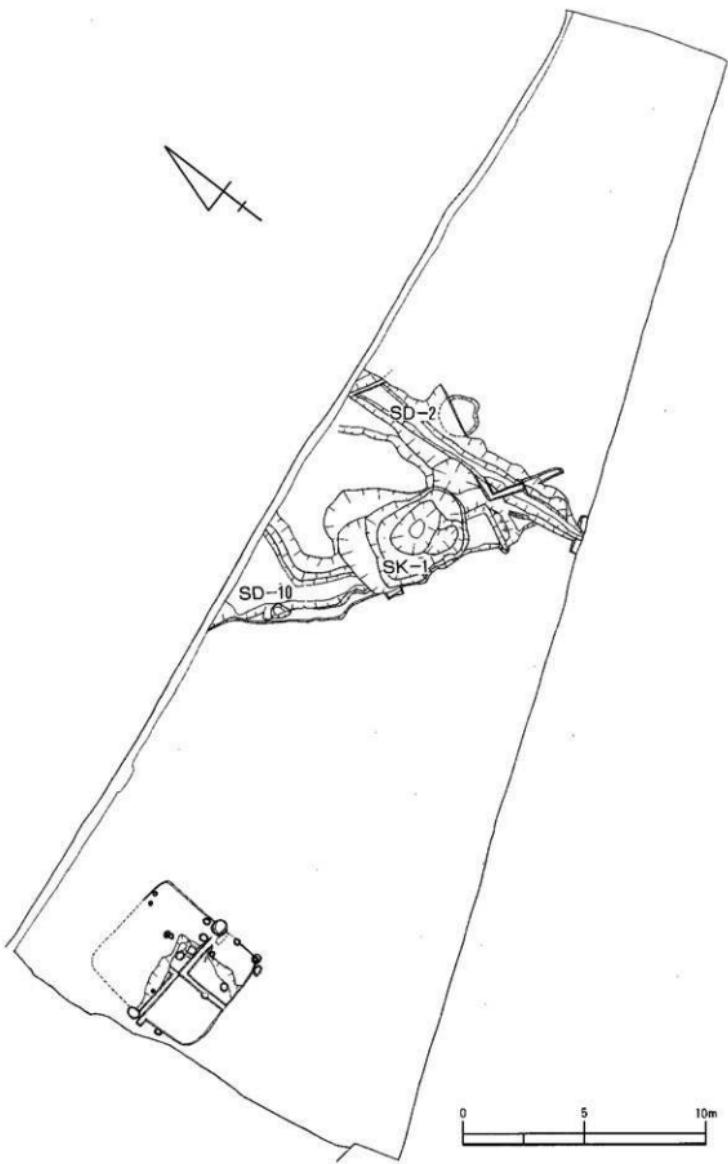


図 7 第7トレンチ下層造構

ほぼこの距離をたもっている。

南北方向の溝については、単位としてはあまり拾うことはできなかった。しかし、東西方向の溝との関係からみても、なんらかの規制を受けている溝ではないかと考えられる。

その他の遺構として、土壙があるが、このSK-1の土壙は、一辺が3mのもので、深さは約5cm程しかなく、また遺物もなかった。

図8 第8トレンチ遺構平面図



## 第7・第8トレンチ出土遺物

遺物は、各トレンチの遺構概要でも述べたように、第1トレンチから第6トレンチまでは、板材以外には出土したものはない。しかし、第7トレンチ、第8トレンチからは、多量の土器が出土した。これらの土器の詳細については遺物観察表を参照されたい。

### 第7トレンチ出土土器

第7トレンチの上層部溝からは、古墳時代から奈良時代ぐらいの須恵器小破片が出土しているが、図示しえるものではなかった。

#### SD-12

SD-12からは、須恵器小破片が、多数出土している。そのほとんどが、図示しえるものではなかったが、その中で残りの良いものについてのみ示した。SD-12の須恵器には、時期差があり、一概に断定の出きるものばかりではなかった。92と94の杯蓋、杯身は出土した須恵器の中で最も古いものである。この時期の須恵器は、この2つのはかにはなかった。小破片も含めて多かったのは、93、95、96の時期の須恵器である。杯蓋は、宝珠のついたものになっており、杯身は底部からまっすぐにのびるものと、高台のつくものとがあり、8世紀代のものと考えている。

#### SK-1

SK-1からは、古式土師器が多量に出土している。これを器種別に分けると、壺、壺、高杯、器台、ミニチュアの壺、鉢である。

壺-壺は口縁部の形態から、「く」の字状口縁のものと、受け口状口縁のものの2種類に分けられる。

「く」の字状口縁のものは、完形品がなく、その全体形については、不明である。しかし、口縁部の形状から、庄内期のようにシャープな立上りを見せず、また、布留式期のような口縁部の肥厚も見られない。これを一つの特徴としてあげることができる。

受け口状口縁のものは、一点のみ完形品がある。これを見てみると、体部中央に最大径があり、ほぼ球形を呈する。この形状は、肩部に最大径がある庄内期の受け口状口縁の壺と比較すると、最大径のある位置が下に下がり過ぎており、布留式期の壺によく似たものと、考えられる。

壺-壺と考えられるものの中には、2重口縁のものがある。また、体部に横描き文様のついたものがあるが、二つとも一部分しかなく詳しいについては不明である。

高杯-完形品はない。脚部と皿部があり、脚部は中央部付近でやや折れ曲がるが、稜線が入るほどではない。皿部は、外側に延びて口縁部は、丸くおさめている。

器台-器台も完形品ではなく、脚部と皿部が別々にあるだけである。

ミニチュアの土器-ミニチュアの土器は壺になるものと、鉢になるものとがある。布留式期の、いわゆる小型丸底壺になるものと考えられるものとして86があげられるが、その他のものは布留式期のものとは、考えがたい。88に見られるような、口縁部の立上りは、庄内期に見られるものと考えられる。

## SD-2 出土遺物

この溝からは、須恵器と土師器が出土しているが、時期的にまとまったものではなかったが、97から104にみられるような古い時期のものが大半を占めている。

杯蓋-97から100までは、口径のおおきいものである。また、かなり深いもので、作りも丁寧な感じをうける。口縁端部内面にゆるやかな凹みをもち、受け部のかえりはほとんど無くなっている。のことより、陶邑編年の2-2に相当すると考えている。

杯一杯は、受け部をもつものと、高台をもつものの2種類がある。受け部をもつものについては、2-2の段階で良いのではないかと考えている。また、高台をもつものについては、8世紀後半と考えている。

土師器皿-1点のみ、土師器の皿が出土している。内面のミガキや、見込の暗文などから8世紀後半と考えている。

## 第8 トレンチ出土遺物

第8トレンチからは、南北に流れる溝の関係から、この溝の上面を精査している最中に、須恵器および土師器が出土した。

須恵器-須恵器は杯蓋と杯身がある。107と108は受け部のかえりが小さいながらもついているもので、2-1段階と考えている。109は、まったくかえりのないもので、2-2から2-3段階と考えている。また、宝珠つまみのついた蓋があり、これは3-1段階に相当すると考えている。杯身は、111のみであったが、口径が小さく深さも浅いもので比較的新しいものではないかと考えられる。

土師器-112と113の土師器は、どちらも甕であるが、時期的には須恵器と比較するともっと新しくなると考えられる。

## 第4章 まとめ

今回の発掘調査では、杉の木遺跡の中央から、東側にかけての部分について、トレンチを設定して調査をおこなった。同時に、蒲生町教育委員会も、杉の木遺跡を南北に継続するようにトレンチを設定して調査を行っている。同教育委員会では、これまでにも杉の木遺跡で発掘調査を行っており、今回設定したトレンチの隣接地では、木製の琴や墨書き器、近世の井戸などを検出している。また、昭和62年度には、堅穴住居などの集落遺構も検出しており、杉の木遺跡全体の性格が把握できるようになってきている。

しかし、今回設定した第1から第6トレンチまでは、特にまとまった遺構は検出されず、また、時期や性格の判明する遺物も出土しなかった。だが、遺構的には、しっかりとしたものが多く、第3トレンチで検出した溝からは、溝の護岸用の板材と考案される木製品が出土した。また、検出した柱穴のなかにも柱当りの残っているものもあり、面的に広げれば、杉の木遺跡の北側部分

の性格もわかるであろう。北東部の集落に近いところでは、遺構面が徐々に下がっており、沼沢地化していることがわかり、現在の集落より西側に集落があったのではないかと推測される。

第7トレントでは、古墳時代初頭の土壤や、溝が検出され、さらにこのころとはほぼ同時期と考えられる竪穴式住居が、トレントの西側で検出された。のことより、前年度に出土した木製の琴などからみて、古墳時代ごろの集落の中心は第7トレントの周辺にあったのではないかと考えられる。また、第7トレントは、この上に重なるようにして、8世紀後半の溝群があり、蒲生町教育委員会が、行っている調査地でも同じような時期の溝群が検出されている。これをも考えに入れれば、この地区は、古墳時代初頭であります集落を形成し、一旦廃絶した後、8世紀後半に、再度集落を形成し、これらの溝を作ったと考えてよいであろう。

第8トレントは、杉の木遺跡の南部に当る。このトレントは、これまでの調査により、古墳時代後半から中世の後半までの時期の遺構が確認されている。しかし、今回の調査では、工事の計画から上層部までの調査となつた。ここでは、中世の素掘り溝群が検出されているが時期的には確かなものではない。また、前述したように、この溝群は、二つの単位にわけられ、この単位は、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。

さて、この溝の性格であるが、この溝の中には遺物がまったく入っておらず、また、深さも約30cmと浅い。一つの単位の中には東西方向の溝が5から6条並列しており、これらの溝が切りあうことはない。

こうした溝は、現状の畑もしくは、水田などにみられる畦や畔などに良くにたものである。南北に走る溝によって、一つの単位が区切られているようにも見ることができる。中世の畑跡という遺構は、現在のところまだ確認されておらず、今回の遺構が畦や畔の遺構であるとは断言できないが、そのほかには、あてはまるようなものは考えられない。

今回設定したトレントからはこの時期の遺構は、まったく検出されておらず、第8トレントを中心とした地域は中世の後半は、畑もしくは水田区域であったと考えられ、現状の地形を見ても、この地域は、水田あるいは畑のある地域となっており、変化はしていない。このことから考えて、中世後半以降は、現状の集落立地とあまり変化していないのではないか、ということがあげられるであろう。

## GGSK Tr-7

器種	器形	岡版番号	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
古式土師器	壺	1	SK-1	口径 14.2 残存率 1/8.1	受口状口縁を呈する。端部はわずかに外方へつまみ出され、内傾する面を成す。端部との境に沈線を1本巡らす。	内外面共不明。	淡黄褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺	2	SK-1	口径 13.8 残存率 1/3	受口状口縁を呈する。端部は内傾する面を成し、端部との境に沈線を1本巡らす。	内外面共不明	淡黄褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	壺	3	SK-1	口径 16.5 残存率 1/3.2	受口状口縁を呈する。端部は内傾する面を成し、端部との境に沈線を1本巡らす。	内外面共不明	淡黄褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺	4	SK-1	口径 17.1 残存率 1/3	受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出され、内傾する面を成す。頸部及び肩部に笠描沈線を施す。	内外面共不明。	茶褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺	5	SK-1	口径 17.0 残存率 1/2.5	受口状口縁を呈する。端部は外方へ強くつまみ出され、内傾する面を成す。端部との境及び肩部に笠描沈線を施す。	口縁部外面横擦で調査。 肩部内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土師器	壺	6	SK-1	口径 16.0 残存率 1/3.4	受口状口縁を呈する。端部はわずかに外方へつまみ出され、内傾する面を成す。端部との境及び肩部に笠描沈線を施す。	内外面共不明	赤灰褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	壺	7	SK-1	口径 16.8 残存率 1/6	受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出され、内傾する面を成す。頸部及び肩部に笠描沈線を施す。	内外面共不明	黃褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺	8	SK-1	口径 18.0 残存率 1/5.2	受口状口縁を呈す。端部は上外方へ強くつまみ出され、内傾する面を成す。頸部及び肩部に横擦?沈線を施す。	内外面共不明。	灰褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺	9	SK-1	口径 18.6 残存率 1/6	受口状口縁を呈す。端部は横方向に強くつまみ出され、半扭な面を成す。端部及び肩部に笠描沈線を施す。	内外面共不明。	淡褐色 やや粗 軟質
古式土師器	壺	10	SK-1	口径 15.8 側部径 23.5 残存率 1/1	受口状口縁を呈す。端部はわずかにつまみ出され、内傾する面を成す。体部は球形を呈し、底部は欠損。頸部及び体部に横擦?沈線を施す。	内面横擦で調査。外面 刷毛調整。	乳褐色 やや粗 軟質
古式土師器	壺	11	SK-1	口径 19.8 残存率 1/5	受口状口縁を呈す。端部は丸く内傾した面を成す。頸部及び肩部に笠描沈線を施す。	内外面共不明。	淡灰褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	壺	12	SK-1	口径 17.3 残存率 1/8.6	受口状口縁を呈す。端部は内傾した面を成す。頸部及び肩部に笠描沈線を施す。	内外面共不明	淡黄灰白色 粗質 軟質

器種	器形	図版番号	出土地点	法 直 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
古式土師器	甕	13	SK-1	口径 14.0 残存率 1/5.5	受口状口縁を呈する。端部は内外面に肥厚し、丸く納める。	内外面共不明。	淡黄灰色 粗質 軟質
古式土師器	甕	14	SK-1	口径 13.6 残存率 1/5	受口状口縁を呈する。端部はわずかに外方へつまみ出され、内傾する面を成す。肩部に擦拂沈擦を施す。	内外面共不明。	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	甕	15	SK-1	口径 15.6 残存率 1/4.2	受口状口縁を呈する。端部は上方へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡褐色 やや粗質 軟質
古式土師器	甕	16	SK-1	口径 15.4 残存率 1/7.9	受口状口縁を呈する。端部は上方へつまみ出され、内傾する面を成す。肩部に窓拂沈擦を施す。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土師器	甕	17	SK-1	口径 14.4 残存率 1/8	受口状口縁を呈する。端部はわずかにつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡黄灰白色 微砂含有 軟質
古式土師器	甕	18	SK-1	口径 16.0 残存率 1/8.2	受口状口縁を呈す。第2口縁は直立し、端部は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土師器	甕	19	SK-1	口径 17.4 残存率 1/8.4	受口状口縁を呈す。第2口縁は直立し、端部は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土師器	甕	20	SK-1	口径 18.2 残存率 1/3.2	受口状口縁を呈す。端部は機方向へつまみ出され、平坦な面を成す。	内面不明。外面刷毛調 整後横擦で。	淡黄灰褐色 粗質 軟質
古式土師器	甕	21	SK-1	口径 17.6 残存率 1/3	受口状口縁を呈す。端部は機方向へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	甕	22	SK-1	口径 17.9 残存率 1/7.5	受口状口縁を呈す。端部は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡灰黄色 粗質 軟質
古式土師器	甕	23	SK-1	口径 17.2 残存率 1/4.5	受口状口縁を呈す。端部は上方へ強くつまみ出され、内傾しごく深い凹を成す。肩部に擦拂直線文を施す。	内外面共不明。	淡黄灰色 粗質 軟質
古式土師器	甕	24	SK-1	口径 14.8 残存率 1/5.6	受口状口縁を呈す。端部はわずかにつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡黄灰色 粗質 軟質
古式土師器	甕	25	SK-1	口径 14.4 残存率 1/4	受口状口縁を呈す。端部は外方へ肥厚し、わずかに平坦な面を成す。	内外面共不明。	淡黄褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	甕	26	SK-1	口径 13.8 残存率 1/6.7	受口状口縁を呈す。端部は上方へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面不明。	淡黄灰色 粗質 軟質
古式土師器	甕	27	SK-1	口径 16.8 残存率 1/3.5	受口状口縁を呈す。端部は上方へつまみ出され、内傾する面を成す。	内外面共不明。	褐色 や粗質 軟質
古式土	甕	28	SK-1	口径 17.0	受口状口縁を呈す。端部	内外面共不明。	淡褐色

器種	器形	図版 番号	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
陶器				残存率 1/5.3	は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。頸部に篦捺痕を施す。		やや粗質 軟質
古式土 師器	甕	29	SK-1	臺口径 18.5 残存率 1/6	・受口状口縁を呈する。端部は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕	30	SK-1	臺口径 15.2 残存率 1/3.3	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出し、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡褐色 やや粗質 軟質
古式土 師器	甕	31	SK-1	口径 14.0 残存率 1/1	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出し、内傾する面を成す。肩部に篦捺痕文を施す。	・内外面共不明。	黄褐色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	32	SK-1	臺口径 16.4 残存率 1/6.4	・受口状口縁を呈する。端部は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡黃灰白色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	33	SK-1	口径 13.3 残存率 1/8	・受口状口縁を呈する。端部は外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡黃灰白色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕	34	SK-1	臺口径 13.6 残存率 1/6.9	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へ強くつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡黃灰色 粗質 やや軟質
古式土 師器	甕	35	SK-1	臺口径 15.0 残存率 1/6.3	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へ強くつまみ出され、内傾する面を成す。強部及び肩部に篦捺直線文を施す。	・内外面共不明。	淡赤灰褐色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	36	SK-1	臺口径 14.8 残存率 1/6.3	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へ強くつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕	37	SK-1	口径 17.6 残存率 1/5.1	・受口状口縁を呈する。端部は横方向へ強くつまみ出され、わずかに平坦な面を成す。	・内面不明。外面剃毛謂 格がわざかに残る。	淡黃灰白色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	38	SK-1	臺口径 15.8 残存率 1/4.2	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡赤黃灰色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	39	SK-1	臺口径 17.1 残存率 1/5.3	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡黃灰色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	40	SK-1	臺口径 16.4 残存率 1/5	・受口状口縁を呈する。端部は外方へ強くつまみ出され、内傾する面を成す。肩部に篦捺直線文を施す。	・内外面共不明。	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕	41	SK-1	臺口径 15.1 残存率 1/8	・受口状口縁を呈する。端部は上方へわずかにつまみ上げ、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	淡黃褐色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	42	SK-1	臺口径 16.8 残存率 1/4	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出され、内傾する面を成す。	・内外面共不明。	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕	43	SK-1	臺口径 15.9 残存率 1/5	・受口状口縁を呈する。端部は上外方へつまみ出され、	・内外面共不明。	灰褐色 微砂含有

器種	基形	國版 登号	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
					内傾する面を成す。		軟質
古式土 師器	甕	44	SK-1	口径 17.8 残存率 1/6	受口状口縁を呈する。端部は上外方へ肥厚し、内傾する面を成す。	内外面共不明。	淡褐色 やや粗質 軟質
古式土 師器	甕	45	SK-1	口径 19.0 残存率 1/5.6	受口状口縁を呈する。端部は上外方へわざかにつまみ上げ、内傾する面を成す。頸部に旋削沈線を施す。	内外面共不明。	淡褐色 やや粗質 軟質
古式土 師器	甕底部	46	SK-1	底径 3.8 残存率 1/6.3	突出した上げ底を呈す。	内外面共不明。	淡黄白色 粗質 軟質
古式土 師器	甕底部	47	SK-1	底径 4.0 残存率 1/3	突出した上げ底を呈す。	内外面共不明。	淡赤灰褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕底部	48	SK-1	底径 4.5 残存率 1/15	突出した上げ底を呈す。	内面撫で調整。外面斜 方向の刷毛調節。	赤褐色 粗質 硬質
古式土 師器	甕底部	49	SK-1	底径 4.0 残存率 1/3.7	やや突出した上げ底を呈す。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質
古式土 師器	甕底部	50	SK-1	底径 6.0 残存率 1/2.5	やや突出した上げ底を呈す。	内外面共不明。	淡赤黃灰色 粗質 軟質
古式土 師器	甕底部	51	SK-1	底径 4.0 残存率 1/1	突出した上げ底を呈す。	内面不明。外面撫で調 整。	淡黄白灰褐色 粗質 軟質
古式土 師器	甕底部	52	SK-1	底径 4.4 残存率 1/1	突出せず、上げ底を呈す。	内面撫で調整。外面斜 方向の刷毛調節。	赤褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕底部	53	SK-1	底径 5.0 残存率 1/3.7	突出した平底を呈す。	内外面共刷毛調整。	黄褐色 粗質 やや軟質
古式土 師器	甕底部	54	SK-1	底径 3.8 残存率	やや突出した上げ底を呈す。	内外面共不明。	灰褐色 微砂含有 軟質
古式土 師器	甕	55	SK-1	口径 14.0 残存率	「く」字状口縁を呈する。 端部は短く垂直気味に立ち上がり丸く納める。	内外面共不明。	淡黄灰褐色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	56	SK-1	口径 14.5 残存率 1/2.3	「く」字状口縁を呈する。 端部は短く垂直気味に立ち上がりやや尖り気味に納める。	内外面共不明。	淡黄色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	57	SK-1	口径 17.0 残存率 1/2.1	「く」字状口縁を呈する。 端部は内側に浅い段を成し、ほぼ平坦な面を成す。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	58	SK-1	口径 15.3 残存率 1/3.2	「く」字状口縁を呈する。 端部は丸く納める。	内外面共不明。	赤褐色 粗質 軟質
古式土 師器	甕	59	SK-1	口径 14.8 残存率 1/6	「く」字状口縁を呈する。 端部はわずかに肥厚し、丸く納める。	内外面方向の刷毛調整。 外面斜方向の刷毛調整。	淡黄灰白色 粗質 軟質

器種	器形	岡版番号	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
古式土師器	広口壺	60	SK-1	口径 15.2 残存率 1/6.6	『く』字状口縁を呈す。端部は外傾する面を成す。	内外面共刷毛後機撫で調整。	淡黄灰褐色 粗質 軟質
古式土師器	広口壺	61	SK-1	口径 16.5 残存率 1/1	『く』字状口縁を呈す。端部は丸く納める。	内面及び外面口縁部機撫で調整。外面体形荒野き。	淡黄褐色 粗質 軟質
古式土師器	広口壺	62	SK-1	口径 15.0 残存率 1/1	『く』字状口縁を呈す。端部は尖り気味に納める。底部は球形を呈するものと思われる。	内面横方向の荒削り、外面不明。	淡黄褐色 やや良質 やや軟質
古式土師器	広口壺	63	SK-1	口径 16.2 残存率 1/6.7	上外方へなだらかに開き、端部は丸く納める。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土師器	広口壺	64	SK-1	口径 15.9 残存率 1/1.7	『く』字状口縁を呈す。上外方へなだらかに外反して開き、端部は丸く納める。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式土師器	広口壺	65	SK-1	口径 12.2 残存率 1/5.9	なだらかに外反して開く口頭部を有す。端部は丸く納める。	内外面共刷毛後機撫で調整。	淡赤褐色 粗質 軟質
古式土師器	広口壺	66	SK-1	口径 17.0 残存率 1/6.3	頭部より屈曲して上方へなだらかに外反して開く口頭部を有す。端部はわずかに尖り気味に納める。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
弥生式土器	広口壺	67	SK-1	口径 18.0 残存率 1/1	頭部より大きく外反し、さらに短く内反気味に立ち上がる口頭部を有す。端部は丸く納め、口縁部中程に縦目あり。	内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
弥生式土器	體部	68	SK-1	残存率 3/8	内面気味に開き、ほぼ球形を呈するものと思われる。外面肩部に梯階窓線文。帶幅波状文を施す。	内面不明。	淡灰褐色 微砂含有 軟質
古式土師器	壺底部	69	SK-1	底径 5.8 残存率 1/2	強く突出した平底を呈す。	内外面不明。外面に指圧痕あり。	淡黄灰色 粗質 軟質
古式土師器	壺底部	70	SK-1	底径 4.8 腹径 4.8 残存率 1/1	体部はほぼ球形を呈するものと思われる。底部は突出せずドーナツ状を呈す。	内外面共不明。	淡黄灰褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺底部	71	SK-1	底径 6.0 残存率 1/1	わずかに突出した丸底を呈す。	内面指かき上げ痕あり、外縁部方向刷毛調整及び撫で調整。	淡黄灰褐色 粗質 軟質
古式土師器	壺台脚部	72	SK-1		『ハ』字状に下外方へ開く脚柱部を呈する。端部は欠損。	円孔を3ヶ所に穿つ。壺部内面撫で調整。外面不明。	淡赤褐色 やや粗質 軟質
古式土師器	壺台脚部	73	SK-1		『ハ』字状に下外方へ開く脚柱部を呈する。端部は欠損。	円孔を3ヶ所に穿つ。壺部内面撫で調整。外面不明。	淡赤褐色 やや粗質 軟質
古式脚上器	高环脚部	74	SK-1		なだらかに外反して開く脚柱部を呈する。端部は欠損。	円孔を3ヶ所に穿つ。内外面共不明。	淡黄灰白色 粗質 軟質
古式脚上器	高环脚部	75	SK-1		なだらかに外反して開く脚柱部を呈する。端部は欠損。	円孔を3ヶ所に穿つ。内外面共不明。	淡赤褐色 微砂含有 軟質

器種	器形	國版 番号	出土地点	法 量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
古式師 土器	高坏脚 部	76	SK-1	臺脚径 1.3.6	・ながらかに外反して開く脚柱部を呈し、端部は丸く納める。	・円孔を3ヶ所に穿つ。脚部内面擦で調整。外面不明。	赤褐色 やや良質 やや軟質
古式師 土器	高坏脚 部	77	SK-1	脚径 1.6.0	・ながらかに外反して開く脚柱部を呈し、端部は丸く納める。	・円孔を3ヶ所に穿つ。脚部内面刷毛調整。外面不明。	淡黄灰白色 やや良質 やや硬質
古式師 土器	高坏脚 部	78	SK-1	脚径 1.5.6 残存率 1/2	・ながらかに外反して開く脚柱部を呈し、端部は平坦な面をなし内接する。	・内面削り後擦で調整。外側削毛調整。	淡黄灰色 やや良質 硬質
古式師 土器	高坏脚 部	79	SK-1	臺脚径 1.4.0 残存率 1/6	・ながらかに外反して開く脚柱部を呈し、端部は丸く納める。	・円孔をヶ所に穿つ。内面しづり目あり。外面不明	赤褐色 微砂含有 軟質
古式師 土器		80	SK-1	口径 1.6.1 残存率 1/2.1	・内面気味に開く坏部を有し、端部は丸く納める。	・坏部内面及び口縁部内外共擦で調整。坏部外面不明。	淡黄灰白色 やや良質 軟質
古式師 土器	高坏	81	SK-1	臺口徑 1.7.0 残存率 1/4.9	・内面氣味に開き、比較的深い形状を呈す。端部は丸く納める。	・内外面共不明。	淡黄褐色 粗質 軟質
古式師 土器	器高	82	SK-1	臺口徑 1.0.0 残存率 1/4.2	・上外方へ直線的に開き、端部は丸く納める。	・内外面共不明。	明赤褐色 やや粗質 軟質
古式師 土器	脚部	83	SK-1	臺脚径 1.0.0 残存率 1/7.5	・内面氣味に「ハ」字状に開き、端部は外方にわずかにつまみ出し、平坦な面で接する。	・円孔を3ヶ所に穿つ。内外面共撫で調整。	淡赤褐色 やや粗質 やや軟質
古式師 土器	小型丸 底盤	84	SK-1	口徑 7.8 脚径 7.9 残存率 1/3.7	・「く」字状口縁を呈し、端部は丸く納める。体部は球形を呈する。底部は欠損。	・内外面共撫で調整、外面はハノリが著しい。	淡黄灰白色 底 やや硬質
古式師 土器	小型丸 底盤	85	SK-1	臺口徑 7.6 臺脚径 7.3 残存率 1/4.1	・「く」字状口縁を呈し、端部は丸く納める。体部は球形を呈すると思われる。底部は欠損。	・内外面共撫で調整。外面口縁部指圧痕あり。	淡黄灰白色 やや密 やや軟質
古式師 土器	小型丸 底盤	86	SK-1	口徑 8.2 残存率 1/1.5	・「く」字状口縁を呈す。直線的に上外方へ開き、端部は丸く納める。体部及び底部欠損。	・内面撫で調整。外面不明。	淡黄灰白色 やや密 やや硬質
古式師 土器	小型丸 底盤	87	SK-1	口徑 8.0 腹径 8.8 残存率 1/2	・「く」字状口縁を呈す。端部は丸く納める。体部は球形を呈するものと思われる。	・内外面共撫で調整。外面には輪肋跡が明瞭に認められる。	淡黄灰白色 やや密 やや硬質
古式師 土器	小型丸 底盤	88	SK-1	口徑 9.2 残存率 1/1.2	・「く」字状口縁を呈す。わずかに内面氣味に伸び、端部は丸く納める。体部は球形を呈するものと思われる。	・内面刷毛後擦で調整。外側横擦で調整。輪肋跡が明瞭に残る。	淡黄灰色 密 硬質
古式師 土器	小型丸 底盤	89	SK-1	口徑 9.2 脚径 9.4 器高 9.1 残存率 1/6.4	・「く」字状口縁を呈す。直線的に上外方へ開き、端部は丸く納める。体部は球形を呈し、丸底を有す。	・口縁部内外面横擦で調整、体部内外面不明。	淡赤黃褐色 粗質 軟質
古式師 土器	小型臺	90	SK-1	臺口徑 8.2 臺脚径 8.3 臺底径 2.4 臺器高 8.0 残存率 1/3.1	・口縁部は丸く外反し、端部は丸く納める。体部はやや長脚形を呈し、突出した平底を有す。	・内外面共指圧痕あり。	淡赤黃褐色 良質 硬質
古式師 土器	小型鉢	91	SK-1	臺口徑 9.1	・ながらかに内面しつつ上方	・内外面横擦で調整。体	淡黄灰色

器種	器形	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考	
				臺底径 臺器高 残存率	2.6 4.9 1/4.8	へ伸び、半球形を呈す。端部は丸く納める。底部はやや上げ底を呈す。	外部笠刷き。	根質 やや硬質
須恵器	环蓋	92	SD-12	臺口徑 器高 残存率	12.0 3.9 1/5.6	口縁部は下方に下り、端部は内傾しわずかに段を成す。天井部はやや高く、丸味を有し後の痕跡が認められる。	口縁部内外面横撫で調整。外部天井部笠刷り。	淡灰青色 やや良質 堅緻
須恵器	环蓋	93	SD-12			天井部は低く平らで、中央に偏平な擬宝珠様のつまみを貼り付ける。	内外面横撫で調整。	淡灰色 やや粗質 堅緻
須恵器	环身	94	SD-12	臺口徑	13.0	立ち上り部は内傾気味に伸び、端部は丸く納める。受け部は外方へつまみ出され、端部は丸く納める。	内外面共横撫で調整。	淡灰色 やや良質 堅緻
須恵器	环身	95	SD-12	臺口徑 臺底径 器高 残存率	12.0 7.4 4.0 1/9.4	平坦な底部より屈曲して上方へ伸びる口縁をもつ。端部は丸く納める。	内外面共横撫で調整。底部外面窓おこし後粗雑な撫で。	淡灰色 やや良質 堅緻
須恵器	环身	96	SD-2	臺底部 残存率	11.3 1/2	半らな底部の外周に断面四角形の高台を直角に貼り付け、端部は水平な面を成す。	内外面共横撫で調整。	青灰色 精良 良
須恵器	环蓋	97	SD-2	口徑 器高 残存率	13.6 4.7 1/2	口縁部は内窓気味に下り、端部は引き出され、内傾する段を成す。後は鈍く、下方に沈穂が進る。天井部は平に近く全体的に扁平な形を呈す。	内面横撫で調整。外面口縁部横撫で調整。天井部笠刷り。	淡灰青色 密 堅緻
須恵器	环蓋	98	SD-2	口徑 器高 残存率	13.6 5.1 1/2.3	口縁部は下方に下り、端部は内傾する段を成す。稜の痕跡は認められず、浅い凹縫が進る。天井部はやや高く、丸味を有す。	内面横撫で調整。外面口縁部横撫で調整。天井部笠刷り。	灰青色 やや良質 堅緻
須恵器	环蓋	99	SD-2	口徑 器高 残存率	14.8 5.1 1/1	口縁部はほぼ垂直に下った後、短かく外反し端部は内傾する面を成す。稜は鈍く、下方に沈穂が進る。天井部はやや高く上面は平らである。	口縁部内外面横撫で調整。天井部笠刷り。	暗青灰色 密 堅緻
須恵器	环蓋	100	SD-2	口徑 器高 残存率	14.4 4.9 1/1.7	口縁部は内窓気味に下り、端部は引き出され内傾する面を成す。稜は鈍く、下方に沈穂が進る。天井部は平らに近く全体的に扁平な形を呈す。	内面及び外面口縁部横撫で調整。外面天井部笠刷り。	淡灰青色 良質 堅緻
須恵器	环身	101	SD-2	臺口徑 残存率	11.4 1/7.0	立ち上り部は長く内傾した後、上方へ伸び端部は丸く納める。受け部は丸く納める。	内外面共横撫で調整。	暗灰色 密 軟質
須恵器	环身	102	SD-2	口徑 器高	13.8 4.9	立ち上り部は長く、内傾しつつ伸び端部は丸く納める。受け部は短かくやや上方へ伸び、端部は丸く納める。底体部はやや深く平らに近い形を呈す。	口縁部内外面横撫で調整。外面底部笠刷り。	淡青灰色 やや良質 堅緻

器種	器形	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考
須恵器	环身	103	SD-2		立ち上り部は欠損。受け部は外方へ短く伸び、端部は丸く納める。底体部はやや深く平らに近い形を呈す。	口縁部内外面横撫で調整、外面底部窓削り。	暗青灰色やや良質堅緻
須恵器	环身	104	SD-2	口径 10.2 残存率 1/5.1	立ち上り部は長く内傾して立ち上り、端部は丸く納める。受け部はほぼ水平方向に短くつまみ出され、端部は丸く納める。	内外面共横撫で調整。	暗青灰色密堅緻
須恵器	环身	105	SD-2	口径 12.5 残存率 1/7.8	半らな底部の外周に断面台形の高台を『ハ』字状に貼り付ける。端部は外方に肥厚し水平な面で接する。	内外面共横撫で調整。	淡青灰色粗質堅緻
埴上器	皿	106	SD-2	口径 9.4 残存率 1/4.0	丸味を持つ底部より内尚気味に立ち上がり、口縁部は強い横撫でにより段を有す。端部は丸く納める。	内面窓磨き。外面横撫で調整。	灰褐色精良良好

## GGSK Tr-8

須恵器	环蓋	107	SD-11	口径 13.9 器高 4.9	口縁部は外下方に下り、端部は内傾する段を成す。縫は高く下方に沈線が巡る。天井部はやや高く丸味をもつ。	口縁部内外面横撫で調整。天井部窓削り。	暗灰緑色良質堅緻
須恵器	环蓋	108	SD-43	口径 12.0 器高 4.4	口縁部は外方に下り、端部は内傾する段を成す。天井部はやや高く平らで明瞭な縫を有す。	天井部外面窓削り、口縁部内外面横撫で調整。	淡青灰色良質堅緻
須恵器	环蓋	109	SD-44	口径 11.6 器高 3.9	口縁部は下外方に下り、端部は内傾する段を成す。天井部はやや低く平らで棱の痕跡がみられる。	天井部外面窓おこし。口縁部内外面横撫で調整。	淡青灰色良質堅緻
須恵器	环蓋	110	Pit	口径 10.1 器高 3.0 残存率 1/1	口縁部は外下方へ下り、端部は丸く内面にかえります。かえりの端部はやや尖気味。天井部はやや高く丸味を持ち、中央にいびつな腹宝珠様のつまみを貼り付ける。	口縁部及びつまみ部内外面横撫で調整。天井部外面窓削り。	青灰色良質堅緻
須恵器	环身	111	P-1	口径 11.5 器高 3.3	立ち上り部は直線的に内側に伸び、端部は丸く納める。受け部は短かく丸く削める。底部は半らで全体的に扁平な形を呈す。	内面横撫で調整。内面窓削り窓おこし。	青灰色やや良質堅緻
古式師七器	広口盤	112	A-1	口径 18.8 残存率 1/17	口縁部で強く外反し、端部は丸く納める。	内部外面削毛目。口縁部内外面不明。	淡黄灰褐色微少含有や硬質
古式師七器	広口盤	113	P-1	口径 18.5 残存率 1/12	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く納める。底部は球形を呈するものと思われる。口縁端部内面に沈線を1木送らす。	内外面不明。	淡黄灰白色粗質軟質

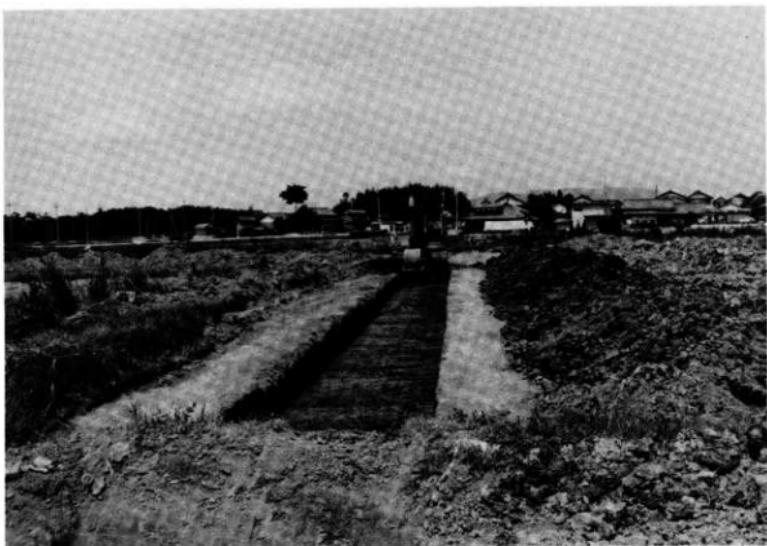
# 図 版



第1トレンチ全景



第1トレンチ全景



第2 トレンチ掘削作業風景



第2 トレンチ全景（東より）



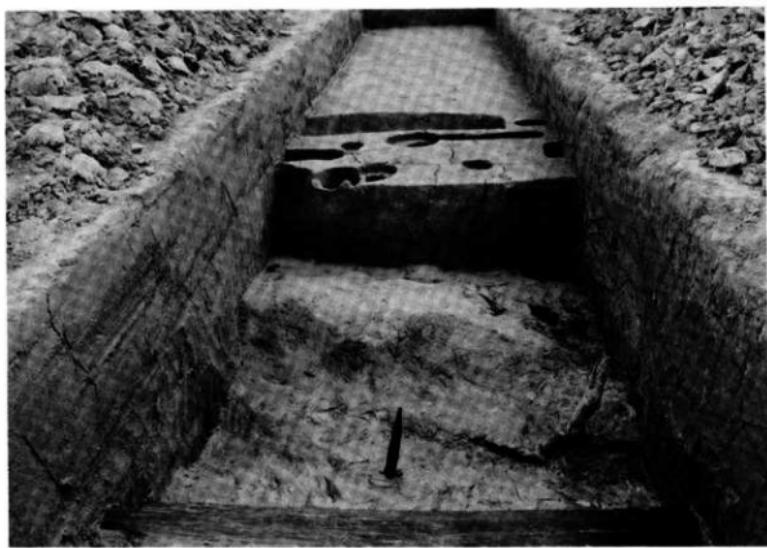
第3 トレンチ全景（西より）



第3 トレンチ遺構検出状況（東より）



第3トレンチ溝検出状況（西より）



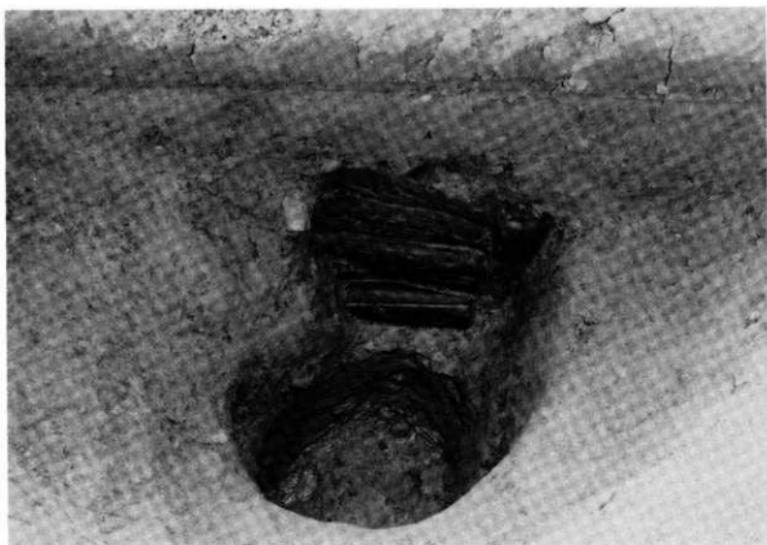
第3トレンチ溝検出状況（東より）



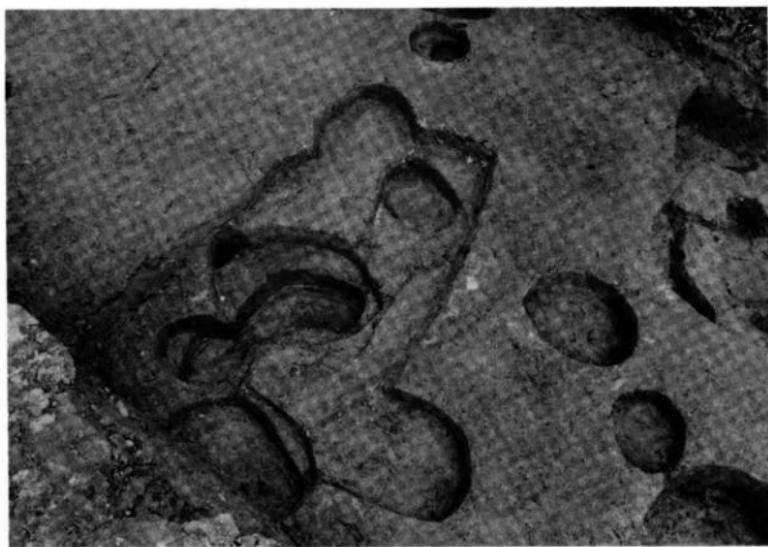
第4トレンチ全景（西より）



第4トレンチ遺構検出状況（西より）



第4 トレンチ井戸検出状況（南より）



第4 トレンチ遺構検出状況



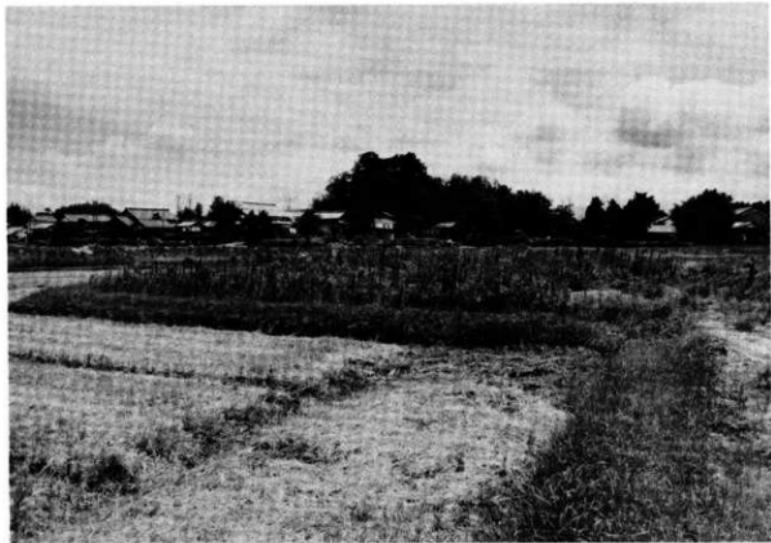
第5 トレンチ全景（西より）



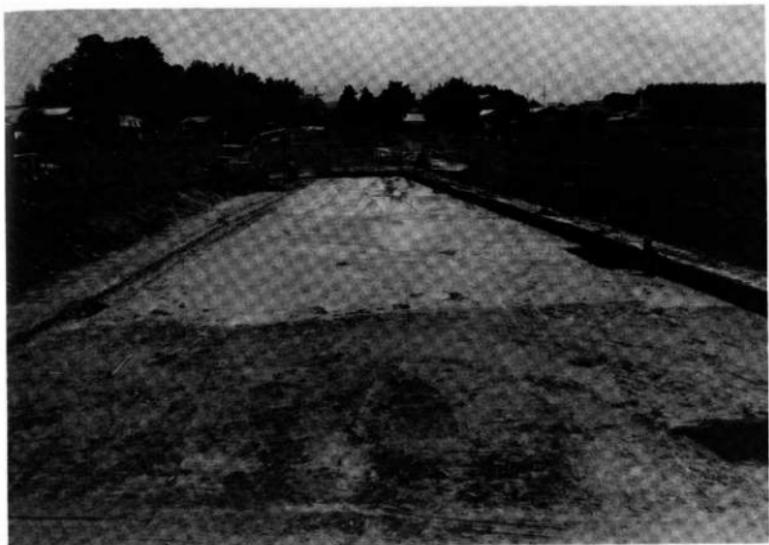
第6 トレンチ掘削作業風景（南より）



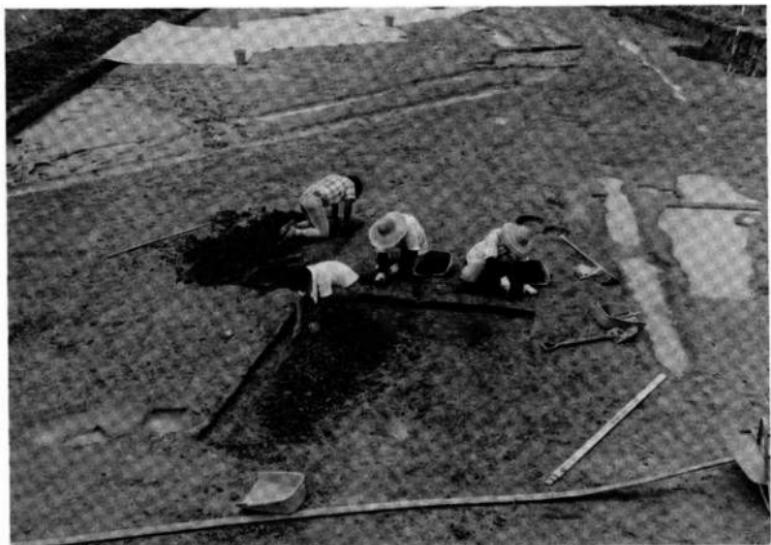
第7、8 トレンチ発掘前風景（北より）



第7 トレンチ発掘前風景（西より）



第7 トレンチ上層部掘削風景（西より）



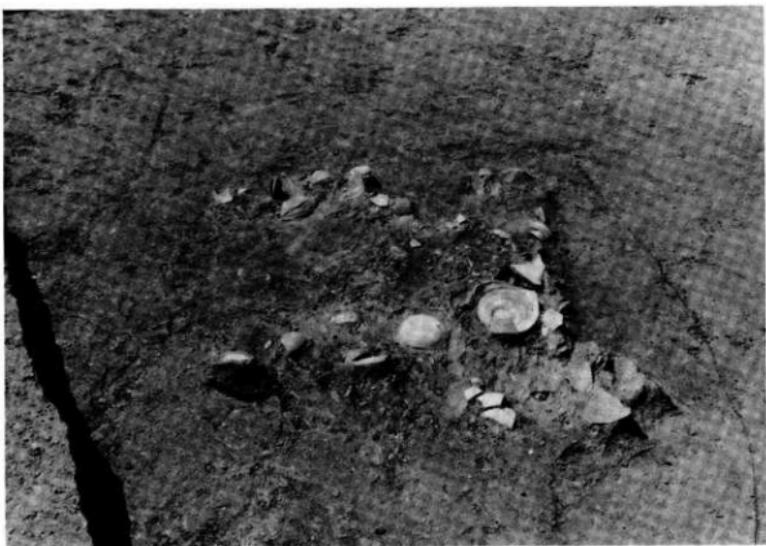
第7 トレンチ上層遺構掘削風景（西より）



第7トレンチSK7024掘削風景



第7トレンチSK7024掘削風景



第7トレンチSD7023遺物出土状況



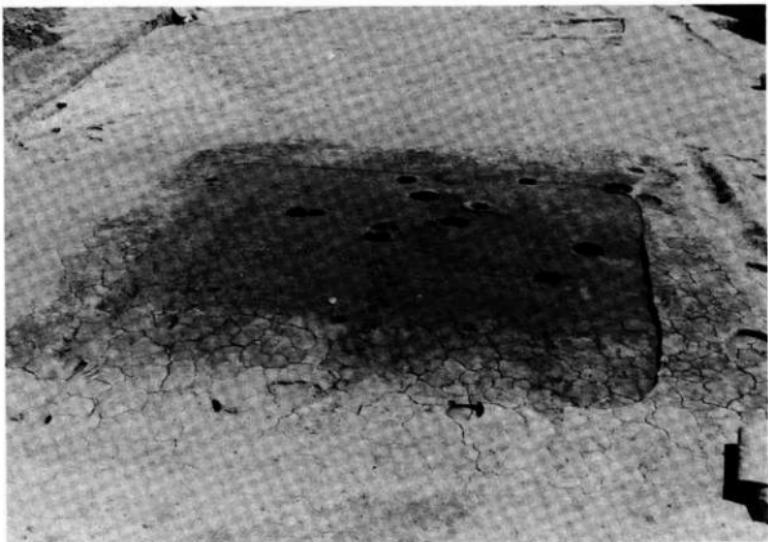
第7トレンチSD7023検出状況（北より）



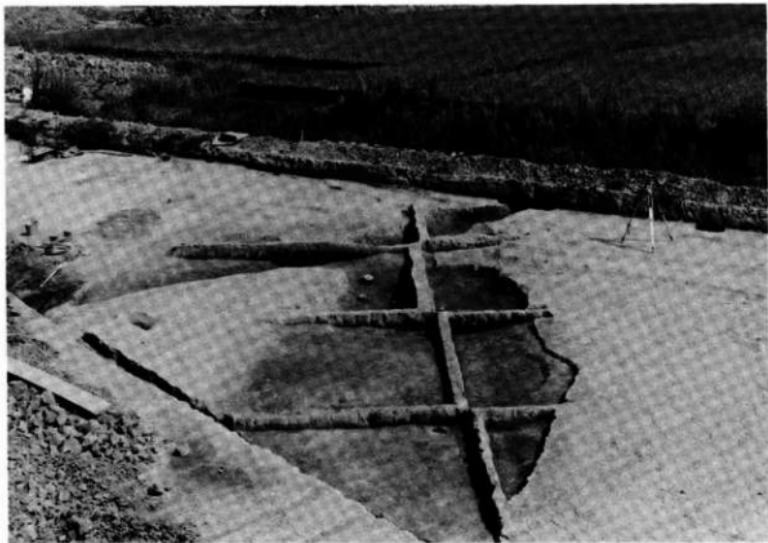
第7トレンチSK7024遺物出土状況



第7トレンチSK7024遺物出土状況



第7トレンチSB7025検出状況（西より）



第7トレンチSK7024・SD7022・23検出状況（北より）



第8 トレンチ掘削作業風景



第8 トレンチ検出作業風景



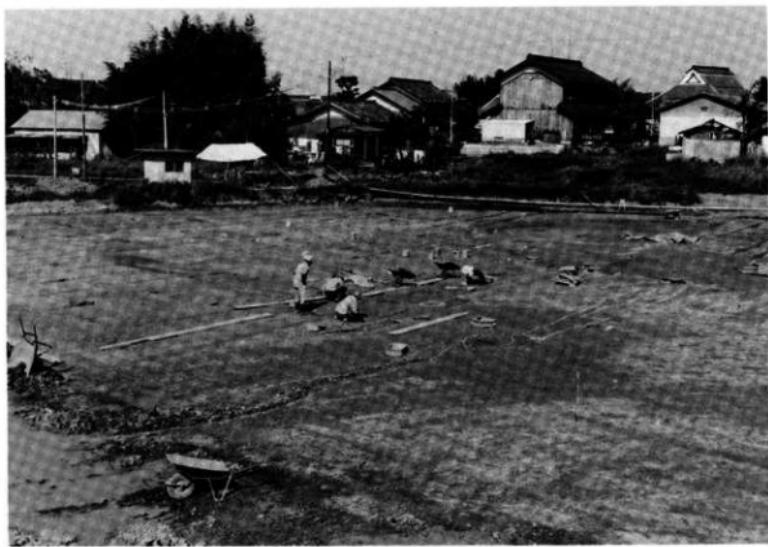
第8 トレンチ北東部遺構掘削風景



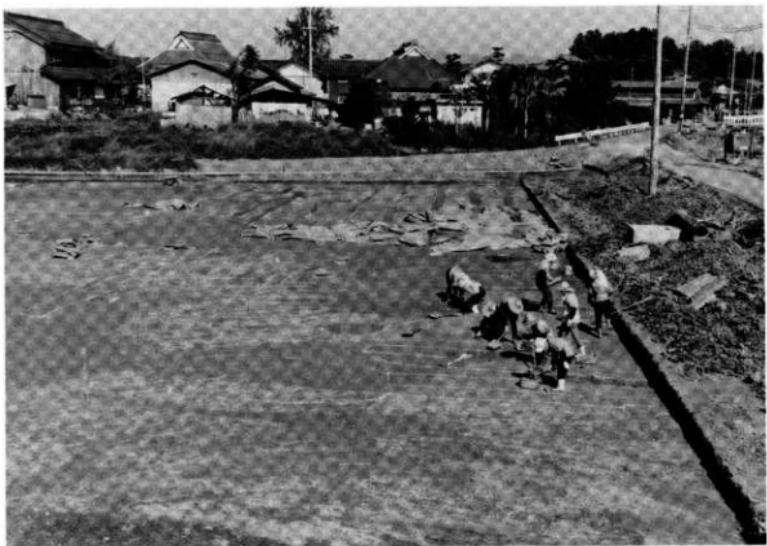
第8 トレンチ南東部遺構掘削風景



第8 トレンチ造構掘削作業風景



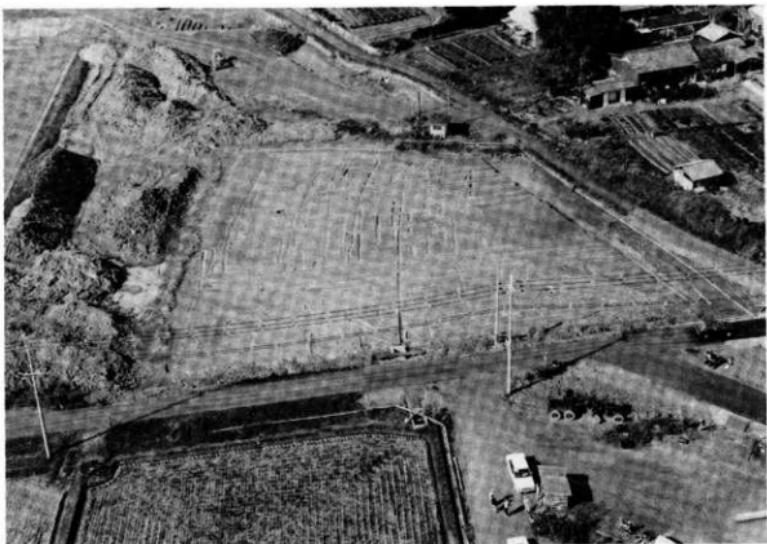
第8 トレンチ中央部造構掘削風景



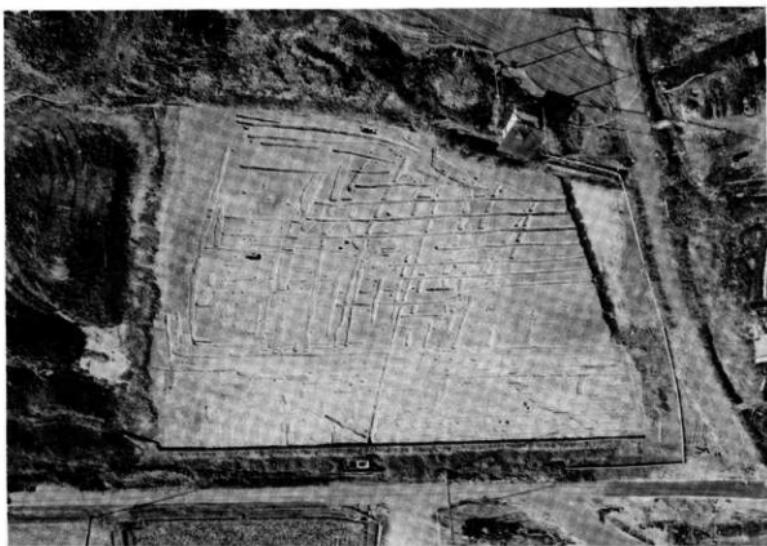
第8 トレンチ南部遺構掘削風景



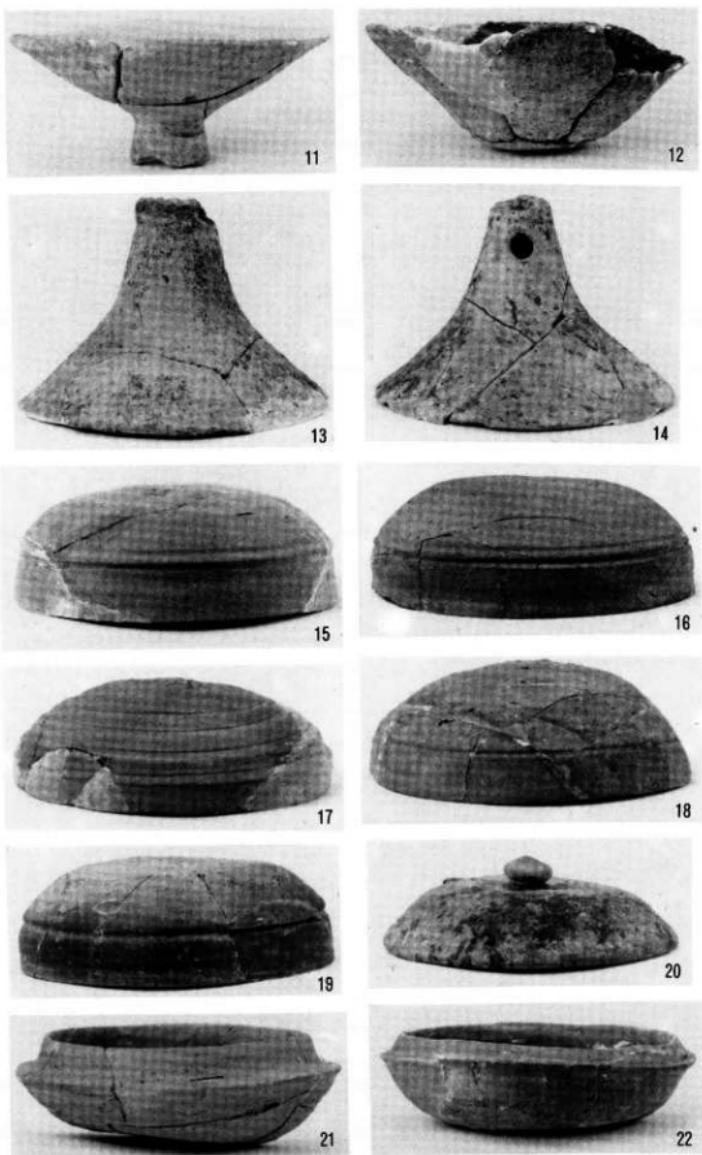
第8 トレンチ南西部遺構検出状況



第8トレンチ全景

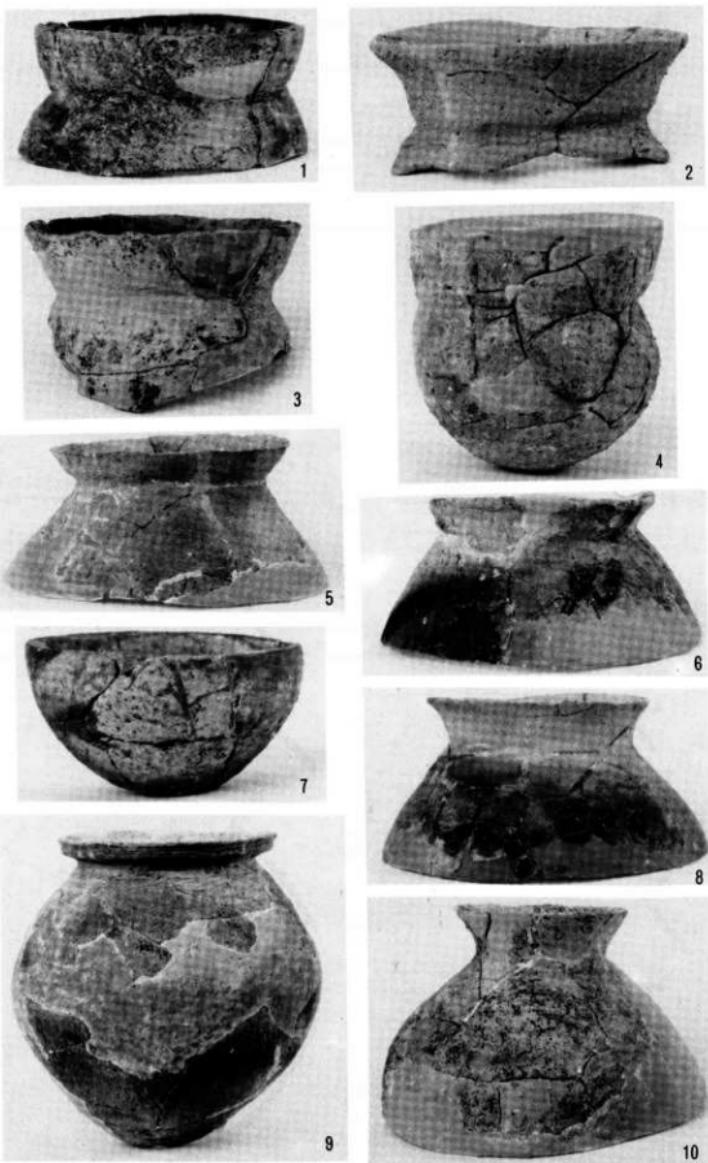


第8トレンチ全景



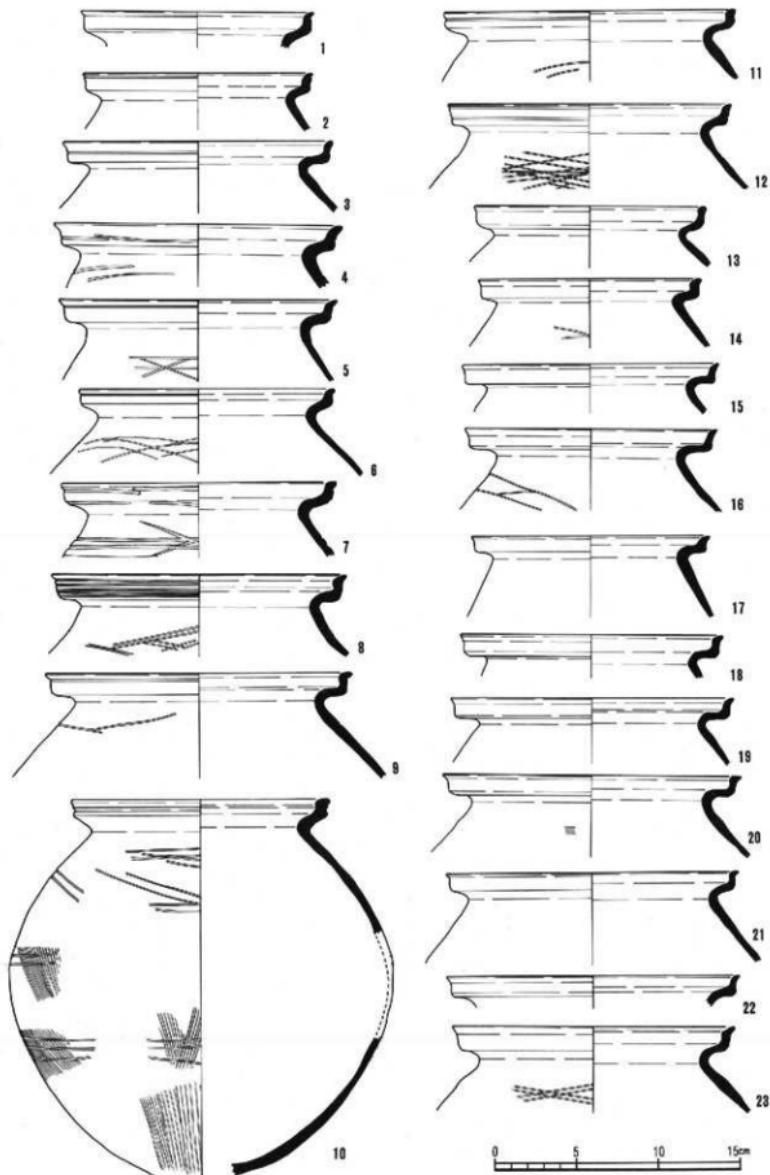
11~14 S K7024

図版二〇 杉ノ木遺跡(遺物)



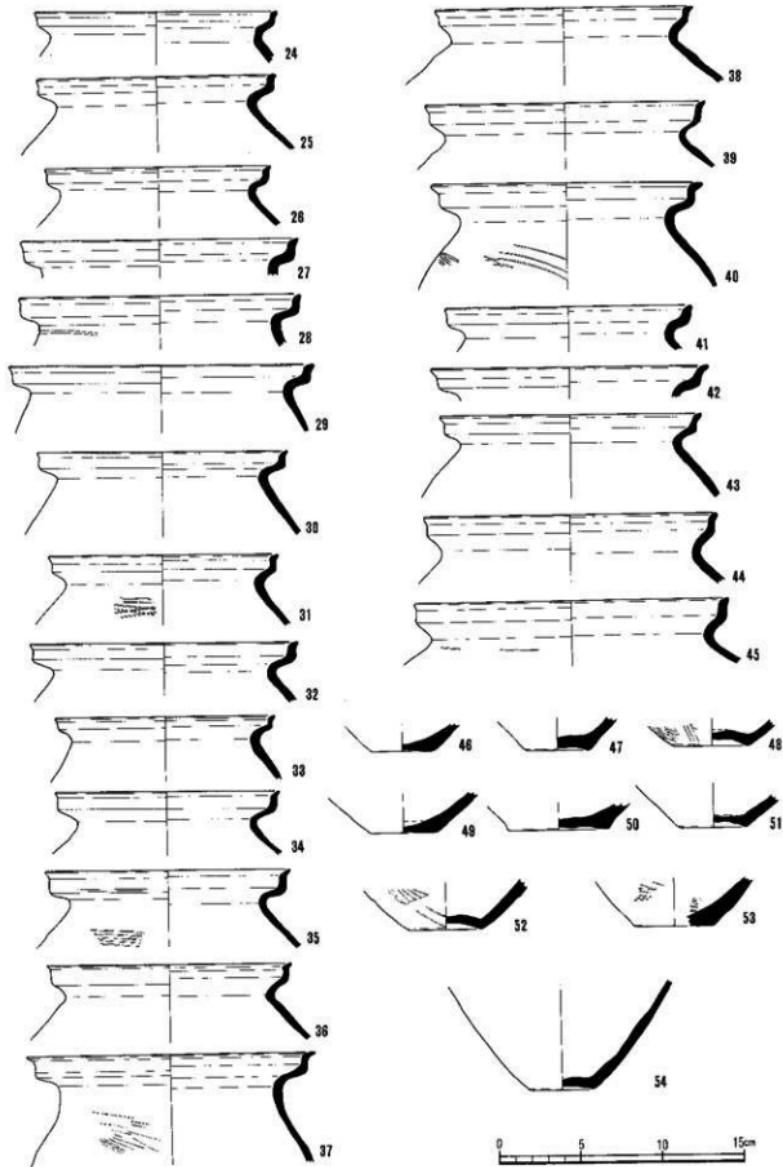
SK7024出土土器

図版二  
杉ノ木遺跡（遺物実測図）(1)



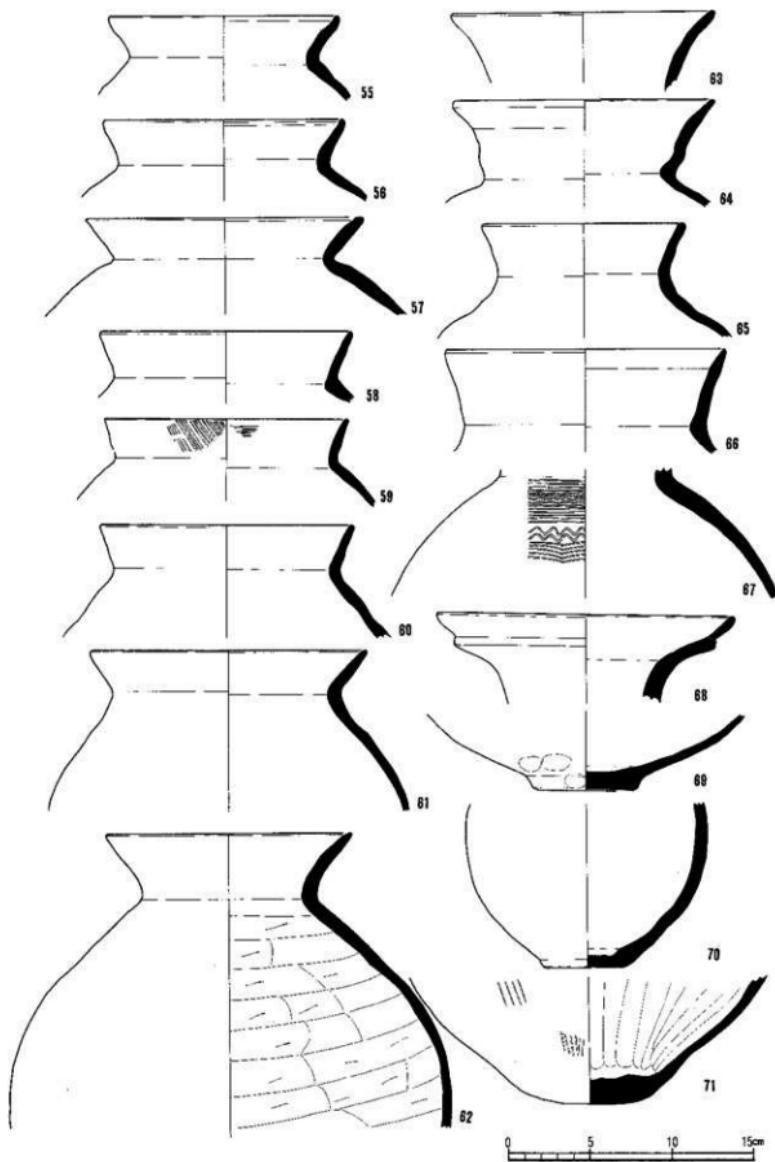
第7 トレンチ SK-1 (1~23)

図版二三 杉ノ木遺跡（遺物実測図）(2)



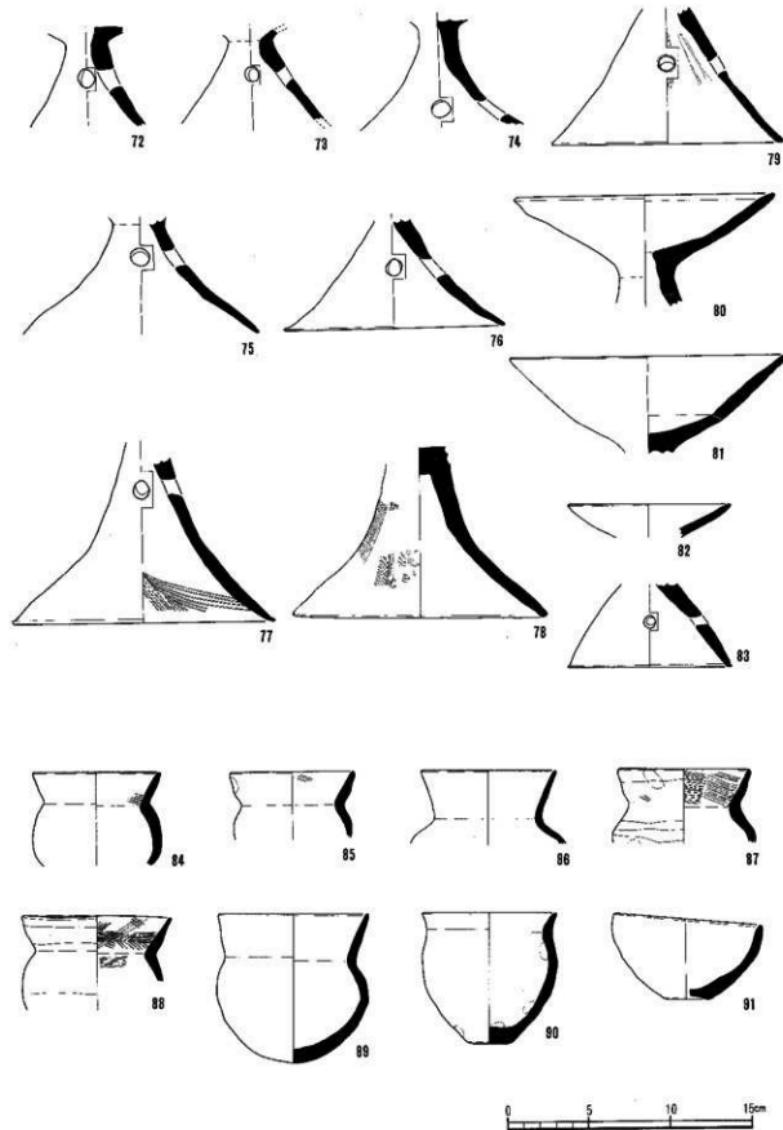
第7トレンチ SK-1 (24~54)

図版二三 杉ノ木遺跡（遺物実測図）(3)

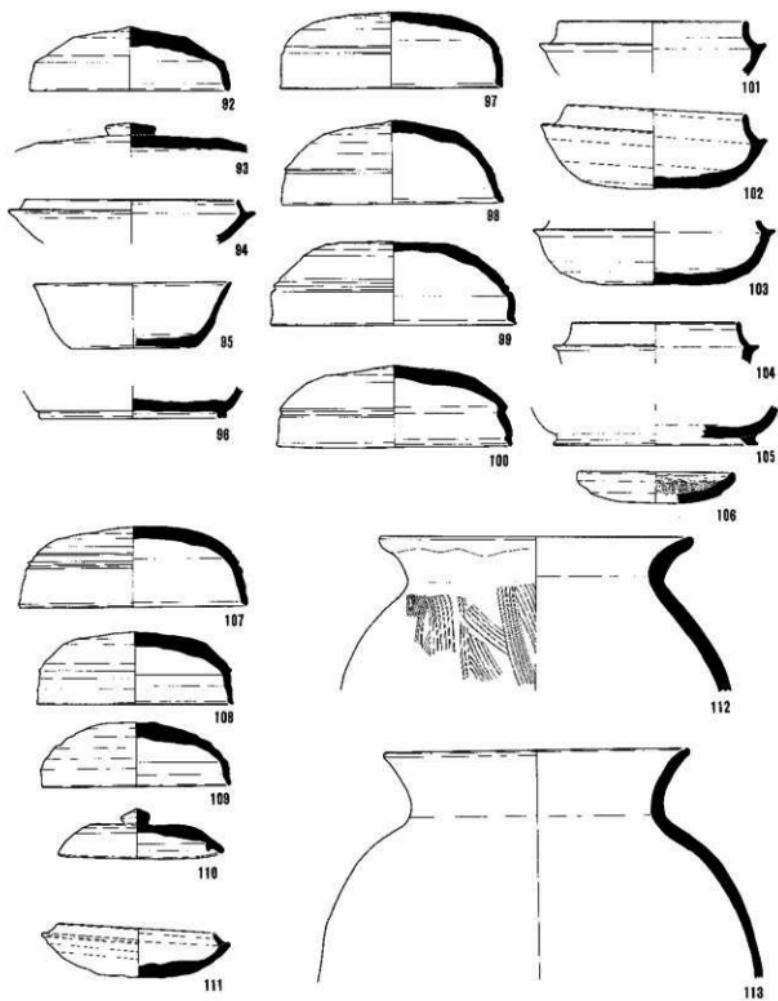


第7トレンチ SK-1 (55~71)

0 5 10 15cm



第7トレンチ SK-1 (72~91)



第7トレンチ SD-2 (92~96) , SK-1 (97~106) 第8トレンチ (107~113)

平成2年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVII-11

杉ノ木遺跡

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121内線2536

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社